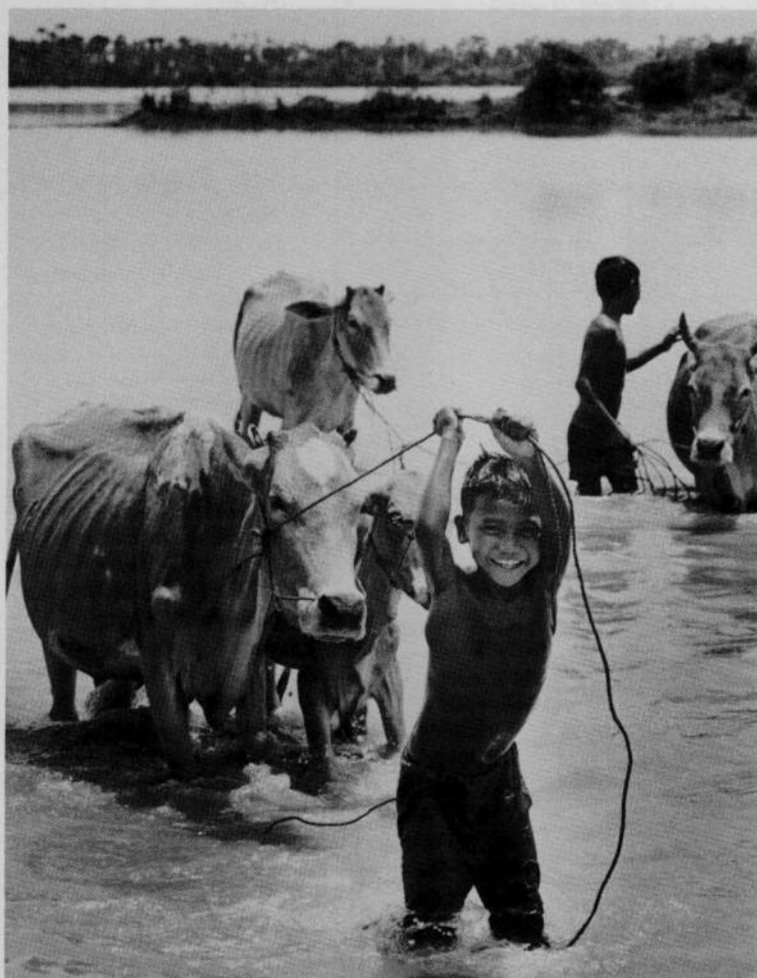


Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.75

試 行 錯 誤



写真提供/毎日新聞社

特集 カンプチアに生きる人々

干ばつ被災地を訪ねて	2	若者たちが惚れこんだ国	21
ライン・キャンペーンへの呼びかけ	6	決断の内側	24
〔資料〕 カンプチアをめぐる国々	8	「栄養関係プログラムを考えるセミナー」	
〔手記〕 カンプチアが好きになりました	10	を開催して	26
政治の壁に立ち向かう	12	ソマリアの日々——⑥	28
特集 カンプチアに生きる人々	15	NGOを訪ねて	29

干ばつ被災地を訪ねて

——カンプチア現状報告——

JVCカンプチア代表 熊岡路矢

村の声

6月以来の記録的な少雨は、カンプチアに干ばつをもたらし、雨期の米の生産に大きな打撃を与えた。雨期の米生産が、耕作面積と生産高の90%を占めるので、11月に始まる乾期以降の深刻な食糧不足は避けられない。85年度、86年度と自給レベル(200万トン)に近づいていた米生産もこの干ばつで一挙に30~35%の減少を生じたと推定される。

数字はともかくとして、JVCプノンペンのメンバーは、10月、かつて箕田さんが井戸を掘った場所の視察もかねて、干ばつ被災地の農民を訪ねた。一見稲が伸びているように見える所も、苗代のまま田植えができない地域であったり、茶色に変色し立ち枯れの徴候を示していた。あたり一面乾ききった場所に最後の雨を期待して、種蒔きや田植えを試みる農民のグループにも出会った。以下は被害のひどい地域の農民の声である。

タケオ県トラム・カク郡ボベル集合村ブレイ・チョール村

プノンベンより国道3号線約30km、付近に大きな川・湖なし

40ヘクタールほどの乾ききった土地で、男性チームと女性チーム合計約70名が分かれ、農作業をしていた。男性陣の作業は乾いた地面の掘り起こし、女性陣は田植えを行っていた。ただし現場も周辺の田も全く水がない。植えている種類は陸稲ではない。

村(ブム)長、ノン・ソル氏(56歳)の話。「うちの村は10のクロム・サマキ(共同作業の単位)でできています。一つのサマキは12から15家族位で、一家族のメンバーは10名以内でしょう。今日は村の半分の家庭から人を出してもらって共同作業をしているところです。地方種の中期米の田植えをしています。

雨は5、6月以降今日まで、例年の30%ぐらいで

しょうか。特に田植えに大事な6月、7月と雨が少なかったのは痛かったです。米の収穫もいつもの年の30%を下回るでしょう。

飲み水用の井戸の水位も大分下がりましたが、幸いまだ涸れてはいません。今食べているものは主におかゆとさつま芋。米のほかに豆、キャッサバ、中国菜、とうもろこしを少し作っていますが、これも雨不足のためほんのちょっとです」。

「このまま行くと、雨期明け、12月より後の食糧はとても厳しい。国か県からの援助がないと、乾期用の種籾に手をつけることになってしまうでしょう。

今日の田植えも、たとえ明日以降かなりの雨が降ったとしても、植えた分が実ると思ってやっている訳ではありません。なんといっても苗床で待ちすぎ、大きくなりすぎたし、また雨があまりに遅すぎた。ただ百姓としてはせっかく苗ができたし、わずかの可能性にもかけて農作業せずにはいられない。家でブラブラしているわけにはいかないんです。

今年の干ばつは、1949年、1964年にもひどい干ばつがあったけど、あれ以来のひどいものです。米とクロマー(布地)をありがとう」。

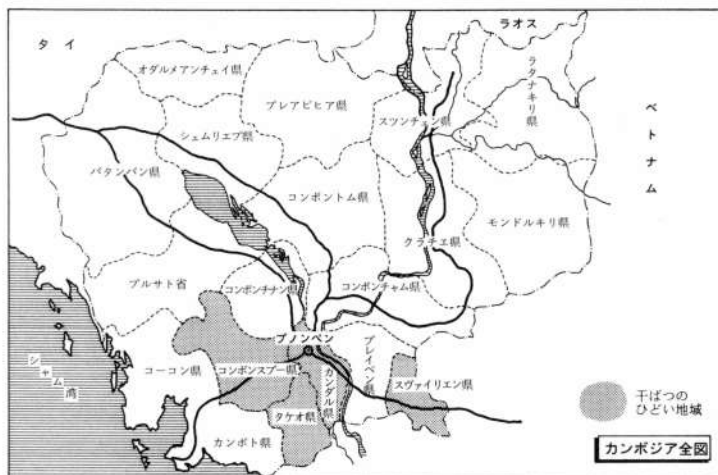
タケオ県サムロン郡セング集合村セング村

プノンベンより国道2号線35km。国道と稲田の間に小川(用水路)が流れ、農民は足こぎ「自転車ペダル」スタイルのかんがい機械を用いて、小規模かんがいを行っている。

ブレイ・チョール村同様、田植えの行われていない土地と一応田植えが終った部分が半々となっている。前の週に降った雨で、田の一部に水が溜っていた。自転車方式のかんがい機がユニーク。

サム・ソウン氏(49歳)の田と家を訪問させて頂き、話を伺う。

「セング村には10のサマキがあり、うち6番目



のサマキに属しています。ひとつのサマキで5～6ヘクタールの田を耕しているのだけど、今年に関しては8月までの雨がほとんど無く、収穫は皆無に等しい。思い出してみると、6、7月に2度、それぞれ5から10mmほどの雨が合ったぐらいでしょうか。9月、10月と少し雨が降るようになりましたが遅すぎて、残念ながら効果は期待できないと思う。今年はひどいものです」。

「米の他は、キャッサバとさつま芋を作っています。飲み水（井戸）はまだあります。そう言えば、何年か前に近くで井戸掘っていた日本人、あなた（養田さんのこと）のこと覚えていますよ。またこの村でも掘って欲しいものです」。

「いま約80kgの種粃を家の中でとってあるけど、食用に回すことになります。それと、ブター匹とにわとり三羽を飼っていますが、11月か12月には売って米に換えなければ」。

「家族は一家9人で、妻と7人の子供がいます。不作としては1979年以来のこと。もっとも1979年の不作は自然の災害ではなくて、ポル・ポト政治とそれが壊れた事によるもので、干ばつとして見ると、自分が生きてきた期間の最悪の規模。雨のないことについては近くのお寺にも聞きに行ったところ、お坊さんは『星の並び方が悪いせいだ』と言っていました……」。

コンボン・スプー県サムロン・トン郡トラボン・コーン集合村トゥル・ブリック村
国道4号線プノンベンより33km

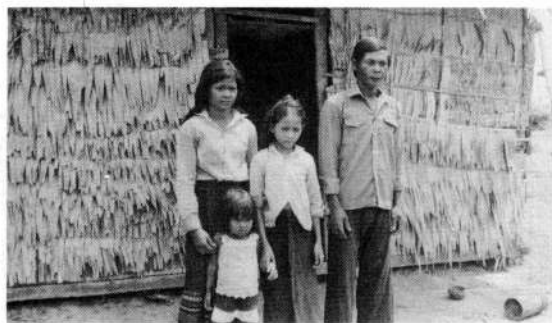
9月30日の訪問の時には、乾ききった土地を耕しIR米を蒔いていたが、10月19日の再訪問時にはうっすら緑色のものが顔を出していた。

村長のギム・リム氏（38歳）を訪問し、話を聞く。
〔10月19日〕

「雨はいつもの年の50%ぐらい降りましたが、その大部分は最近1カ月のものです。苗はできたものの田植えができず立ち枯れたもの、あるいは遅い田植えと水不足で穂の実りそうもないものが、大部分です。今年の雨期米の損害は60～70%に達しています」。

「例年は13家族（一つのサマキ）で19ヘクタールを耕し、28～30トンの収穫をあげていました。IR米の田んぼについては、去年1ヘクタールあたり3トンとれました。9月30日の時はIR36の種を蒔いていました。（あの時、写真撮られたのでよく覚えています。）10月の雨に期待して働きましたが、収穫は少ないでしょう」。

「今年は私の覚えている限りで、一番悪い年です。6人家族で一年に少なくとも900kgの米が必要ですが、かなりの部分買わなきゃなりません。買う時の値段は1kgにつき15～19リエルもします。私はブタを売るつもりです。村人のなかには砂糖やしから砂糖を作っている人もいて、米と交換しています。もう飲み水も底をつきました……」。



ギム・リム氏と家族

街の声

7月、8月頃ブノンペンで雨が降ったり、雨雲を見る度に、「農村の方へ向かって下さい」と、町の者は祈っていたのだが、結局干ばつは進行し、かつてない被害が予想されている。町の市場でも、米の価格がじわじわと上がり始め、他の物価へも跳返りつつある。年の初めに1kg 12リエルから17リエルぐらいで買えた米も、最低が15～16リエルとなり、上級米は20リエルを越えるようになった。〔注：1リエルは実勢で約1円〕

相変わらず200から300リエルという、低いレベルに抑えられている、公務員の月給にも不満の声が募っている。前に有償であった、公務員への現物支給（米、砂糖、塩、石鹼など）の一部が無償になったとはいえ、生活はとても苦しい。彼らは英仏語の私塾や家族経営の店、肉体労働などのアルバイトでしのいでいる。

一方、コー・コン島やコンボン・ソム港特別市とのリンクで成立っている、半ば公認された形の「密輸」に従事する人々は、ぐんぐん金持ちになっている。港の工事が始められたらしく、ブノンペンからコンボン・ソムへの商店主や労働者の移動が口コミで伝えられている。

「チョー・ムラターン」運動について

直訳すると「基地へ行こう」という運動で、この場合「基地」とはカンプチアの生産基盤である、農村を指す。かつて中国で実施された、「下放」運動と同じような意味を持つ。

ヘン・サムリン政権およびカンプチア人民革命党では、党の中堅幹部、青年同盟など大衆運動体の中堅幹部および各官庁の局長、副局長クラスを対象に、1年間から3年間の範囲で、農村地域への赴任を義務づけている。中国の「下放」同様、都市インテリによる援農活動、都市と農村のギャップ解消を目指

す、相互理解や人事の交流を目指しているようである。

去年までは3カ月以内の短期間だったのに、長期の任命になったこと、そして目的の是非はともかくとして多くの場合、家族と離れて単身赴任しなければならぬことから、選ばれた人々とその家族はとも悩んでいた。ともかく、約500人がブノンペンでの2カ月の事前研修を修了し、家族と水盃をかわし、10月地方へ散って行った。

政治解決＝国民和解に向けて

7月「カンプチア問題」解決への、いわゆる「カクテル・パーティ」形式のカンプチア4派による会談案が、インドラシアーベトナム外相会議で合意された。しかし8月これを受けたASEAN臨時外相会議は、会談直後に設ける第二次会談へのベトナムの即時参加という条件をつけることによって、事実上この案を葬り去った。

8月28日、ホイ・カントール氏ほか、パリ在住のカンプチア人長老7名が（実際にはシハヌーク氏の意を受けた上で）、カンプチアの敵対する4派にあって、「カンプチア問題」の解決と民族和解のため早急に会談をもつよう要請状を送った。4派とは、シハヌーク派、ボル・ポト派、ソン・サン派およびヘン・サムリン派である。取りあえず、12月のシハヌーク国家元首とフン・セン首相（カンプチア人民共和国＝ヘン・サムリン政権）の会談が決まった。

ブノンペンの街の会話でも、シハヌーク殿下の復帰を伴う国民和解、（国連や西側諸国との）国際関係の正常化が、希望を持って語られている。10月中のシハヌーク殿下一時帰国のデマも流れるなどして、街の清掃、美化に務めるブノンペンの今日この頃である。



（左）街の清掃も急ピッチで行われている。

（右）平和を待ち望むブノンペンの人々
写真提供/毎日新聞社

カンブチア国内干ばつ救援に向けてのアピール

’87年11月7日(東京)

1. 干ばつ被災の実状

国連カンブチア人道援助オフィス、カンブチア農業省および民間救援団体の報告そしてJVCの現地調査によれば、カンブチア国内の1987年度とりわけ雨期(4月～10月)の稲作生産は、干ばつのため大きな被害を受けた。雨期全体の雨量は例年の70%に達する情勢ではあるものの、田植え時期の最も水が必要とされる6月、7月、8月の3カ月に雨が著しく少なかったために、昨年度の米生産実績200万トン(粳)の30%～35%の減少は避けられない見込みである。

干ばつは低地平野部ではなはだしく、それもメコン河およびトンレ・サップ湖の両水系から距離のある地域がひどい被害を受けている。タケオ県、コンボン・スプー県、カンダール県、スヴァイ・リエン県などが最も厳しい地域である。これらの農村では、飲み水の不足や米だけではなく農業全般の不振から、農民や子供たちの間に栄養不良と病気が広がっている。また河川・貯水池の水位の低下、肥料の不足および、種粳の一部を食用にまわさざるを得ない状況のために、乾期(10月～4月)の米生産にも危険信号が点っている。

干ばつの被災の、特にひどい地区を4カ所例示する。

- ①タケオ県 トラム・カク郡 ②タケオ県 サムロン郡 ③コンボン・スプー県 サムロン・トン郡
④カンダール県 カンダール・ストゥン郡

2. JVCの救援計画とアピール

現状の分析と農業専門家のアドバイスを基に、私たちは次のように判断する。カンブチアの今年度の干ばつは20～30年に一度の大きな干ばつである。そして水の不足と農業への打撃は、とりわけ農村部の人々の栄養・健康状態への深刻な影響を伴っている。したがって次の二つの面での救援活動が急務である。「飲み水」とかんがい用水の二つの水不足を補う活動。特に乾期の米生産、農業生産を「水」の面から支える。他方、食糧援助と補助栄養給食の活動を強め、農民およびその子供たちの健康を守る。この活動は乾期用種粳の保持にもつながる。

具体的には3つの活動を提案し、日本の市民の皆様および各市民団体の御支援を受け実行に移す計画である。なお従来通り、JVCは全ての活動を自ら実施し、物資の配布についても最終受益者の段階までモニターし、また同時に各支援団体による視察を行う。また活動の実施に当たっては、既に7月15日ブノンペンで完成した、JVC「サンタピエップ」ワークショップを拠点として移動チームを編成する。

① 食用米の配布 東南アジア地域より米を購入し、カンブチア赤十字(WFPの食糧配布を担当)と共に上記4地区など最も困窮している農村で配布する。

目標＝最低100トン。1トン4万6500円として465万円が最低募金目標。

② 乾期のかんがい作業に貢献するように、1980年欧米の民間団体によって寄付された後、壊れたままになっている、約2000台以上の小型かんがいポンプ(総数約4千台でヤンマー、クボタ等日本製が多い)の一部を修理する。農業省水利局と英国の民間団体OXFAMが協力団体である。

目標＝最低50台以上。1台当りの修理費用約10万円として500万円が募金目標。

修理費用としてはスペア・パーツ購入費、油脂代、移動チームの燃料代を含む。

③ 飲み水確保のための井戸掘り活動。タケオ県、コンボン・スプー県など上記4地区を中心に40本の井戸を実現する。1982年以來の作業同様、手押しポンプ付きで完成する。

目標＝40本以上。井戸1基あたり15万円として600万円が募金目標。

以上の救援活動の重要性と緊急性を御理解の上、市民および各市民団体の皆さんの火急なる御支援を心よりお願いします。

JVC東京事務所およびブノンペン事務所スタッフ(メンバー)一同

ライン・キャンペーンへの呼びかけ

キャンプチアの母親とともに子供の健康を守ろう！

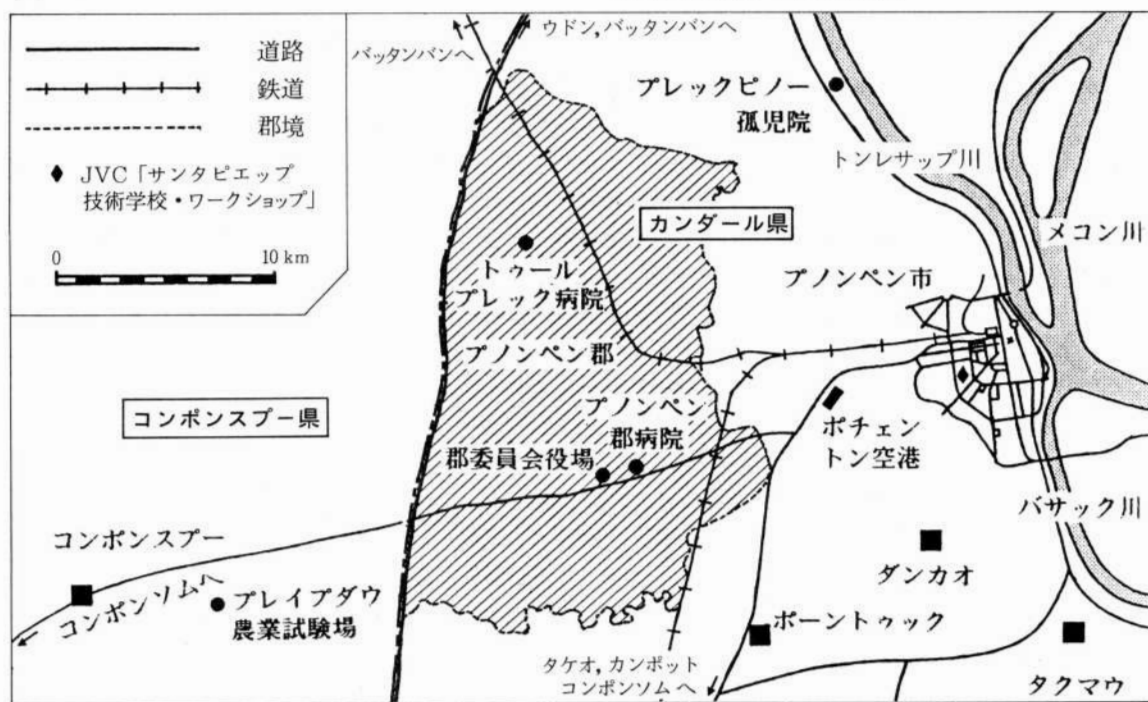
カンパチアはユニセフが「静かな緊急事態」とみなすように、世界で最も乳児死亡率の高い国々の一つに数えられ、栄養失調と伝染病が子供の健康を蝕んでいます。きれいな水が充分得られないこと、衛生環境が整備されていないこと、そしてなによりも貧しいことがその原因です。子供の健康を守るための活動の基盤は過去の戦争と動乱の期間に崩壊しており、1000人の新生児のうち145人の子供が1歳になる前に命を失ってしまうといわれています。(日本はわずか6人、1985年ユニセフ統計資料による)

ライン(RINE)とは多くの人にとってはまだ耳慣れない言葉ですが、カンブチアでは子供の命に関わる重要な意味を持っています。子供の健康を守るための活動の拠点として、カンブチアでは現在までに全国18県のうち8県の中心地とプノンペン市でライン・センターが設立されました。その活動は保健省や婦人連盟などカンブチア人自身の努力と、ユニセフや数少ないNGO(民間救援団体)の協力により実施されています。しかしながら、その活動の多くはまだ取り組まれたばかりで、カンブチアの母親たちはともに子供の健康を守ってくれる人を求めています。

JVCはカンブチアに常駐し救援活動を行う唯一の日本のNGOとして、子供たちの苦痛を目の当たりにし、母親たちの切実な願いに耳を傾けてきました。これまでに現地の保健省やユニセフなどとの協力関係をつつと築き上げ、1987年からこのライン・センターの活動を支援し続けています。

その実績に基づき、1988年よりその活動に本格的に参加するため、カンダール県プノンベン郡で病院に附属するライン・センターを設立し、そこに住む約6万人を対象とする活動を開始します。ライン・センターの建設やカンブチア人を訓練する医療従事者の派遣などには約1000万円かかります。この募金への皆さんのご協力を求めています。

また、これを契機として、カンパチアの人々がこれから平和に暮らしていけるようになるには日本社会がどうすればよいのかを、少しでも多くの皆さんとともに考える機会を設けるため、「ライン・キャンペーン」という運動を展開していきます。少しでも多くの皆さんが私たちの趣旨に賛同して下さり、「カンパチアの母親とともに子供の健康を守ろう!」を合いこばにこの運動と一緒に進めてくださるよう心からお願いいたします。



ライン(RINE)とは.....

(写真提供/毎日新聞社)

R. リハイドレーション (補水)

カンブチアでは数多くの子供が下痢で脱水症状を起こし命を失っています。それを防ぐには、点滴の他に、おもゆなどに少量の塩と砂糖を溶かして飲ませる方法が効果的です。なによりも家庭で安く手軽に作れることこそ貧しい人々にとっては大切なことです。この経口補水療法(オーラル・リハイドレーション・セラピー)をライン・センターを通じて各家庭に普及させることにより、下痢のために命を失う子供の数は大幅に減るはずで



I. イミュナイゼーション (予防接種)

ハシカ・破傷風・百日咳・ジフテリア・ポリオ・結核は予防接種により防ぐことができます。カンブチアではこれらの病気で多くの子供が命を失い、それと同じ数の子供が障害児となっています。子供が接種を受けられるようになるには、なによりも母親がその必要性を正しく理解することが大切です。ユニセフは予防接種普及事業(EPI)をライン・センターとモーバイル(巡回)・ラインの活動の一環として行っています。



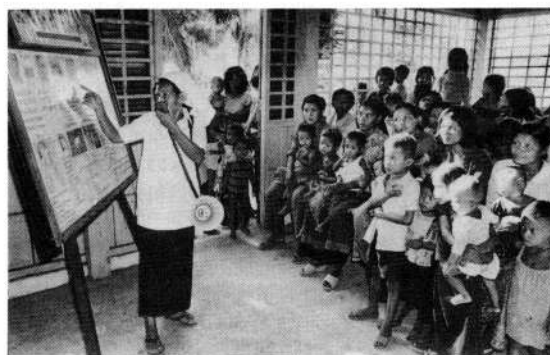
N. ニュートリション (栄養)

子供の成長には蛋白質が欠かせません。栄養失調の子供は蛋白質の不足により下半身がむくみ、髪の色が抜けたり、カロリーと蛋白質の両方の不足により手足ががりにやせ、老人のような顔になったりします。その兆候を早期発見するために、ライン・センターでは母親が毎月子供の体重を測って発育グラフに記入します。体重が増えていない子供の健康には危険が迫っており、栄養価の高いボポー(クメール語で『おかゆ』の意味)などの給食が与えられます。



E. エデュケーション (教育)

子供にとって最良の保健員は母親です。RINEの「RIN」のうちどれをとっても、母親の正しい理解なしには成り立ちません。各地方で安く手に入れられる材料を用いていかにボポーを調理するかを教えることにより、母親は家庭で子供の栄養状態を改善できます。また、母乳は育や計画出産、離乳食の与え方、病気の予防や処置、公衆衛生などについての知識を学ぶことは、母親にとって子供の健康を守る砦を築きあげることです。



カンブチア国民和解への動き

5. 9 民主カンブチア連合政府のソン・サン首相、インドネシアの調整工作に歓迎の意を表明
5. 14 シハヌーク大統領が、連合政府の同盟者であるクメール・ルージュ（ボル・ポト派）による自派兵士の被害に抗議し、大統領の期限付き辞任を表明
5. 30 タイ・カンブチア国境のサイト2（ソン・サン派避難民キャンプ）が砲撃される
6. 2 ソン・サン首相、「解放後のカンブチアで自由で民主的な選挙が実施されれば民衆はクメール・ルージュを排斥するだろう」とオランダのハーグで発言
8. 12 ベトナム・ラオス・カンブチアの外務次官会議がプノンペンで開かれ、非公式対話提案への合意を確認
8. 19 カンブチア人民共和国（ヘン・サムリン政権）のフン・セン首相、「我々は戦争を終えるために戦争を用いることはできない」と述べ連合政府の指導者たちとの話し合いの準備はあるとしたが、クメール・ルージュの政治・軍事的な排斥の必要性を表明
8. 28 在仏のシハヌーク時代のカンブチアの政府高官7人が、シハヌーク殿下とその子息、キュー・サンバンとソン・セン（クメール・ルージュ）、ソン・サンとサク・ストゥコンの連合政府の3派とヘン・サムリンとフン・センのカンブチア人民共和国の代表者による協議を持つよう招待状を送付
8. 29 連合政府のシハヌーク殿下、ソン・サン首相、キュー・サンバン副大統領が中国を公式訪問するために北京入りし、中国の趙紫陽首相と31日に会談。シハヌーク殿下は中国の援助に感謝の意を述べた
9. 16 シハヌーク殿下、先月28日付のカンブチアの長老たちからの4者会談の招待を受諾したと報告
9. 21 フン・セン首相が、キュー・サンバン副大統領となら政治解決について喜んで話し合うと述べたが、カンブチア人民共和国の法廷で罪を宣告されたボル・ポトとイエ・サリとの会談は依然として拒否すると発言
9. 28 ソン・サン首相が代弁したシハヌーク大統領の国連総会における演説は、ベトナム軍のカンブチアからの全面撤退以前にカンブチア人民共和国の人々が彼らの連合政府に参加し4派連合政府を形成すること、ベトナム軍が明確な期間以内に国連の監視下でカンブチアから2段階で撤退することを新しく提案、その後、カンブチア人民共和国はその提案を受け入れ、ベトナムはそれを支持すると宣言。しかし、ソン・サン派はまだ公式に応えておらず、クメール・ルージュは反対の意を表明
10. 8 カンブチア人民共和国のフン・セン首相は、シハヌーク殿下に会う用意があるとし、国民和解が成立した後は、同殿下の和平への貢献に応じ国家の指導機関の中で高い地位を保障するなど、従来より弾力的な姿勢を示す声明を発表
10. 24 ソン・サン首相は、慎重な姿勢ながら、シハヌーク殿下のフン・セン首相との対話姿勢への支持を表明
11. 20 シハヌーク殿下は、フン・セン首相とのバリ会談に応じることを正式に了承
12. 2 シハヌーク殿下とフン・セン首相は、バリ近郊で初会談し、4日、カンブチア情勢に関し①紛争の政治的解決②カンブチア全当事者による交渉③合意保証のための国際会議招集④88年に平壤とパリでの双方の再会——の合意4項目を骨子とする共同コミュニケに調印した

米国・中国・ソ連・ベトナム

4. 14 モスクワで第10回中ソ外務次官級協議が開催され、カンブチア問題などが話し合われた
4. 15 ベトナムのグエン・バン・リン共産党書記長が、中国がボル・ポト派への援助を止めれば即時にカンブチアのベトナム軍を撤退すると発言したと報道された
4. 17 ソ連の援助でプノンペンに地上通信衛星施設が完成し、外国への電話通信が可能となる
5. 14 タイの国家安全評議会はソ連が1986年にカンブチアへ総額2億米ドルの軍事援助を行ったと報告
7. 3 ベトナム外務省が、6月にシンガポールで国連の特別大使とASEAN諸国外相により討議された4項目提案は受け入れがたいものであると述べた
7. 28 ソ連のゴルバチョフ共産党書記長、カンブチア人民共和国のヘン・サムリン国家評議会議長とモスクワで会談
8. 20 中国の趙紫陽首相がタイのシティ外相と北京で会い、趙紫陽首相はASEANが合意したカクテル・パーティーの提案に反対の意を表明
8. 26 ソ連・ベトナム・ラオス・カンブチアの各国の外務省関係者がプノンペンで会議を開催し、カンブチア問題の政治解決に向けての国民和解の政策に合意
9. 20 中国の呉学謙外相とソ連のシュワルナゼ外相が国連で会談し、呉外相は「中国はカンブチアの国民和解がシハヌーク殿下の統率の下に実現されることを支持する」という声明を発表
9. 30 ベトナム外務省、シハヌーク殿下が提唱した4者会談を公式に支持することを発表
10. 2 シハヌーク殿下と国連で非公式に会談したシュルツ国務長官は、カンブチアの自由と独立を獲得しようとするシハヌーク殿下の役割への米国の完全な支持を強調。米国国会では1986年に350万米ドル、1987年に500万米ドルのソン・サン派とシハヌーク派への援助を承認
10. 4 ベトナムのグエン・コ・タク外相らは、ASEAN諸国外相がニューヨークで先月28日発表した共同声明への対案を作成し、少なくともタイと中国が、そして米国もカクテル・パーティーに参加しなければならないと発言
10. 16 ベトナムの党機関誌は、国連総会の15日の決議が「誤りの、偏った」ものであり、ベトナム軍の一方的な撤退の要求だけで、クメール・ルージュの復権の危険に対処していない、と述べた
10. 17 ソ連は、カンブチア人民共和国がシハヌーク殿下にカンブチアに戻ってきて高い地位に就くよう招待していることに歓迎の意を表明
10. 29 シハヌーク殿下と北京で会談した中国の李先念首席が、カンブチア問題の合理的な政治解決を探るためシハヌーク殿下がなしてきた全ての努力を十分に尊重すると発言
11. 4 ソ連がカンブチア人民共和国に1986年から90年にかけて4000万ルーブルの経済援助を行っていると報道
11. 20 在北京ベトナム大使館により、ベトナムはフン・セン首相とシハヌーク殿下の会談の支持を表明
11. 29 カンブチアに駐留するベトナム軍が、2万人程度の規模で第6次部分撤退を実施した

ASEAN (アセアン諸国)

4. 29 インドネシアのモフタル外相と会談したシンガポールのダナバラン外相は、「ASEANはボル・ボトを権力の座につけるための運動に従事するつもりはない」と述べ、ボル・ボトの復権に反対する立場を強調
5. 10 タイのシティ外相、ASEAN諸国を代表してソ連を公式訪問。シティ外相は「カンブチア問題の政治解決に対するソ連の影響力行使」を求めたのに対して、ソ連のシュワルナゼ外相は「ベトナムは政治解決を真剣に考えている。ただ、ソ連とベトナムは特別な関係にあり、それを変えるわけにはいかない」と答えた
6. 19 タイのシティ外相は、カンブチア問題に関連して「ソ連のベトナムに対する影響力行使には限度がある」と発言
6. 21 ASEANは連合政府のキュー・サンバン副大統領に、彼が率いるクメール・ルージュが同盟者であるシハヌーク派とソン・サン派への攻撃と殺害を止め、タイ・カンブチア国境沿いのキャンプのカンブチア避難民の人権を尊重するよう勧告
7. 29 先頃ベトナムを訪問したインドネシアのモフタル外相によれば、ベトナムは、民主カンブチア連合政府とヘン・サムリン政権の代表を集めてカクテルパーティー方式で非公式対話を行うという、インドネシアの提案に肯定的反応を示した
8. 16 ASEAN緊急外相会議がバンコクで開かれ、7月末にベトナムとインドネシアにより打ち出された、カンブチア問題の政治解決への非公式対話(カクテルパーティー方式)の推進について対応策を協議、その結果ASEAN側としては、非公式対話を「ベトナムとカンブチア当事者間で対話を開始していくための場として歓迎する」とした上で、「ベトナム・インドネシア共同声明では、カンブチア当事者の協議に続き、ベトナムなどの関係国が参加するとしているが、ベトナムは当事者協議後、直ちに参加すべきだ」と主張
9. 28 ASEAN諸国外相がニューヨークで会談し、共同声明を発表
10. 9 タイ外務省は、カンブチア人民共和国が8日発表したカンブチア問題政治解決のための提案について、「タイ政府としてはカンブチア問題に関する国連決議および民主カンブチア3派連合政府の8項目提案を支持する姿勢に変わりはない」と拒否の意向を表明
11. 14 タイのシティ外相は、ベトナムのゲン・コ・タク外相からの、カンブチア問題の解決について議論するために会談を持つという提案を受け入れたと発言
11. 17 タイのチャワリット陸軍司令官は3日、「カンブチア問題はヘン・サムリン政権とクメール・ルージュの間の内乱である」と述べたが、タイ外務省は、この発言はソ連に向けてなされたものであると説明
11. 22 タイのチャワリット陸軍司令官が、タイ軍の高官としては初めてソ連を公式訪問し、帰国
11. 23 インドネシアとベトナムの外務省代表団がバリ島で会談し、7月にホーチミンでインドネシアのモフタル外相とベトナムのゲン・コ・タク外相との間で達した了解を具体化する方法を協議
11. 23 タイ外務省、シハヌーク殿下のフン・セン首相とのバリ会談の支持を表明

その他の諸外国・国際機関等

4. 7 ニューヨークに本部を置くカンボジア証拠書類提出委員会(デビット・ホーク理事)が集めた民主カンブチア(クメール・ルージュ)の200万人と見積られる集団大虐殺の証拠書類に基づき、映画『キリング・フィールド』の題材となった実在の人物、ディス・ブランを含めた200人のカンブチア人が連名で、『集団殺害罪の防止及び処罰に関する条約』を批准したオランダや米国などの国々に、オランダのハーグにある国際裁判所に民主カンブチアを告訴するよう勧告
6. 3 ロンドンに本部を置くアムネスティ・インターナショナルが、カンブチアにおける人権侵犯に関する調査報告を発表
6. 29 ベルギーのブラッセル、欧州クエーカー協議会で第2回「カンブチアに関するNGO会議」が開催。カンブチア国内の救援に関わってきたJVCのようなNGOなど26団体の代表者が参加し、カンブチア問題の解決のためのNGOによる国際キャンペーンなどについて協議した。(本誌72号参照)
7. 5 タイ・スウェーデン大使が、もしベトナム軍が1990年までにカンブチアから撤退しないなら、ベトナムへのSIDA(スウェーデン国際開発援助)による援助姿勢を変化させる、と最近発言。大部分の非共産主義国は、ベトナムのカンブチア支配に抗議して援助を差し控えているが、スウェーデンの国会は5月初め、1987年から88年の会計年度でベトナムへの3億クローネの援助を承認
7. 13 インドの遺跡修復専門家のチームは、カンブチア人の専門家と労働者を率い、アンコール・ワットの修復の第1段階を6カ月かけて完了、修復の全工程には6年かかり、1000万米ドルの費用が見積られている
7. 25 3派連合政府の指導者たちと20カ国以上の諸外国の学者たちを招いて、バンコクで第3回「カンブチア国際会議」を開催
8. 26 国連事務総長特別代表キブリア氏が、カンブチアへ国連を通して援助する各国へ、カンブチア国内で最も干ばつで被災している地域への緊急援助を要請
9. 10 カンブチアへ国連を通して援助する国々の会議がニューヨークで開催。特に目立ったのは、イギリスがUNBRO(国連国境救援機関)に対して25万ポンドの追加の寄付を、救援関係者が近づけるキャンプにのみそれを使うという条件で申し出たこと。タイ・カンブチア国境上の8つの避難民キャンプには5つのクメール・ルージュのキャンプが含まれており、そのうち4つのキャンプではクメール・ルージュにより国連職員が近づくことが許されておらず、援助物資の配給が監視できない
10. 15 国連総会において、ベトナムに対して、カンブチアから軍隊を撤退しカンブチア人の民族自決を許すようにという要求の決議が、117対21、棄権16の投票結果で採択された
11. 5 タイ・カンブチア国境沿いのカンブチア避難民のために活動する8団体のNGOが国連事務総長に対して連名の手紙を最近送り、カンブチア避難民の保護の必要性を満たすためにUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)が重要な役割を果たせるし、果たすべきであると提案

(製作 古西 勇)

カンブチアが好きになりました

自動車整備士 馬 清

雨上がり

雨期に入ったカンブチアは、風も太陽もやさしくなっていた。今年は雨が少なく、米のできが心配されているが、5月に比べると草が茂り、緑も濃くなり、カンブチアの人々と同じく静かで穏やかな思いがした。

プノンペン、モノロムホテル6階のレストランから夕焼けのバンコ（湖）を眼下に、ベトナムビールを飲み、林の中に立っている町を眺めていると、外国に居る気がせず、日本の地方の町でのんびりしているように錯覚する。バンコの先には田園地帯が広がり、地平線にもうしわけ程度に小さな山の先が出ている。今の私が一番気にしている場所である。東京やバンコクでは、騒音とスモッグの中で忙しく動きまわらないと自分の場所がなくなるようで、自分の主張を強くしないと生きている様な気がしないが、カンブチアは、人々、自転車、シクロがゆったりと流れるように動き、穏やかに生きている思いがする。

プノンペンは農村の中に町がある感じがする。牛も豚も鶏もたくさん見かける。犬も猫もたくさんいるが、犬の吠える声さえ聞いた事がないように思う。今のカンブチアは毎日のように雨が降るが、スコールと言えるほどではない。地面を濡らす程度の雨が多い。それでも子供たちは雨の中を走り、水たまりに入り歓声を上げている。どこの国の子供たちも水が好きようだ。雨が上がると赤トンボが飛び、人々の動きが始まり賑やかになる。

カンブチアの人々が私を引き止めた

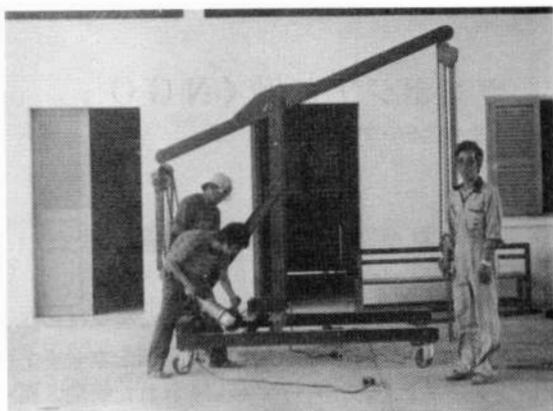
5月に初めてカンブチアに入った。暑かった。バンコクより一段と暑く、また、初めての事でもあり、体調を崩してしまった。食事も合わなかった。合わせられなかったようだ。正直に言えば、もうあまり行きたくなかった。行かなくても良いのであれば、やめようかとも思った。しかし、カンブチアで知り

合った人たちとの約束が私を動かした。「また帰ってくるか」「いつ帰ってくるのか」と聞かれ「1カ月で帰ってくる。かならずカンブチアに来る」と約束した事が、私に行こうと決意させたと思う。

初めて見たカンブチアは、これが解放後8年たった国とはとても思えなかった。日本で言えば戦後3目ぐらいに見えた。きれいな街路樹の中に道は走っているが、どの家もビルも、修理をしたようには見えなかった。一步裏通りに入れば、ゴミの山があり、ドブがあり、たまらない臭いがした。ハエが多く、じっとして居ても汗が流れるのに、その上、手にも足にもハエが集まる。追い払っていてもすぐ集まる。追い払う気もなくなってくる。レストランもテーブルの上にハエが黒くなっている。手で払いながら食事をする。油が良くないのか、すぐ胃がもたれる。下痢をする。気力がなくなるの繰り返しだったと思う。

その中での救いは、カンブチアの人々だった。知り合ったほとんどの人は何人も家族を亡くしていた。もう現場を見なくても、博物館へ行かなくても、ポール・ボトの行った事は明らかだった。その中でカンブチアの人たちは優しい笑顔をうかべながら、穏やかに一所懸命生きている。町も活気づいていた。新しい生活に、生きてゆく事に、力いっぱい戦っているように思えた。父を失い、母を失い、兄弟を失い、家族全員を失った人も何人もいた。それに今でも体調の良くない人が多い。病気を持っていたり、病人を抱えている人が多いようだ。そんな中で、特に女性のがんばっている。

つい数年前に、こんな事があったとは信じられないような優しい人々が多い。悲しみや苦しみが大きかった人ほど思いやりがあり、優しくなれるのではないかと思った。ホテルのスタッフも、ワークショップの人々も、私は今とても気にしている。もちろん、すべてのカンブチア人が良い人とはかぎらな



カンブチアにもすっかり慣れました
(サンタ・ピエップ技術学校で)

い。どの国でも良い人も居れば悪い人も居るが、私のまわりの人々が良い人が多いという事だ。今日を生きる事に必死な人々である以上、貧しい人々が多い国である以上、悪い人もいれば、悲しい人も居る。私たちから見れば気力のない働き方、動き方をしているし、やる気がないのかと苛つく事もある。気候が違い風土も違う以上それを責める事は出来ないし、体力も回復していない人々が多い以上、こちらでもカンブチア人になったつもりで、ゆったり合わせる以外に、共に生活は出来ないのではないかと思います。

みんなが食べるものは“うまい”

今、私は毎日ワークショップへ行く。倉庫棟の建設が進んでいる。工場は内装もほぼ終り、もうすぐ仕事が始められるところまで来た。隣のトラックターミナルで修理をしている運転手が時々聞きに来る。行って見たり、修理を手伝ったりしている。話をしたり、カンブチア語を教わったりしていると、物売りの少女たちが来る。初めはスタッフやワーカーが買ってくれた。菓子のような物あり、バナナの葉でくるんだ物あり、酒のような物もあった。よくながめて食べる。ギョッとすることもある。みんな見ている。どうだと言われる。旨いと言っても通じないのでgoodだと言う事にしている。事実おいしい物も口に合わない物もあるが、みんな食べている以上大丈夫だと思う事にしている。

今回はとても体調が良い。涼しいせいもあるかもしれないが、自分自身覚悟が決まったからだとも思う。もちろん食べ物には気をつけている。特に油物は気をつける事にしている。それ以外は気にしない事にした。気にすると不潔な所はいくらでもあり、

食べられなくなってしまう。屋台で水を買ってお茶に入れてくれた事もある。お茶が濁っている事もある。今まででなんともない。カンブチア人が食べている以上私も大丈夫と思う事にしている。

英語も出来ず、もちろんカンブチア語も出来なくても、なんとなく通じ合う。わからない時は辞典を出し、運転手に通訳をしてもらう。最近では、運転手のソーンもボウラも行き帰りや挨拶ぐらい日本語が通じるようになってしまい、私の英語は全然上達しなくなってしまった。また私も色が黒くなり、カンブチア人だと冗談に言われている。私もそうだと答えている。

この国でがんばろう

カンブチアの人々はかなりの技術力も知識もあると思う。工具も部品も無いなかで、とてもよく修理をして動かしている。8月の終りにスタッフの選考試験があった。実技を見ていて感心してしまった。物の無い中での工夫と言う事では、日本では思いもつかない様な事を行っていた。

プノンペンに居ると他の国の人々ともよく会う。ボランティアまたはNGOとは何なんだと考える事も多い。このことは他の機会にするが、この国の人に対する態度に私は腹が立つ事が多い。私自身カンブチアの歴史も、政治の動向も良くわからないが、カンブチアの人々を不幸にしたのはボル・ポトとシハヌークであるがこの国へ来て思った。そして今でもこの国の人々の希望と未来を閉ざしているのがこのふたりだと思える。この国をもっと豊かにし、希望が見え未来が信じられる国にしていく事、そして、子供たちが安心して生活できる環境に早くして行く以外に難民問題の真の解決はないのではないかと思います。これはラオスもベトナムも同じ事だろう。

リエッケエさん(カンブチアに長いNGOの女性)が私に言ってくれた言葉がある。「この国でがんばるためには笑顔と忍耐が大事ですよ」そのとおりだと思った。私もこの言葉を自分のものにして、私に出来る事があるかぎりカンブチアでがんばりたいと思っている。



政治の壁に立ち向かう

カンボジアで働くNGO

(カンプチア)

毎日新聞社 社会部 藤原 健

私たち（毎日新聞大阪本社写真部、阿佐部伸一記者と私）がカンボジアを訪れたのは、今年4月末から5月中旬までの2週間。ちょうど乾期から雨期への季節の変わり目だった。だが、滞在中、夕方に雨が降ったのは3回だけで、この夏の干ばつの始まりをうかがわせていた。

私たちは、毎日新聞が1979年以降毎年続けている「飢餓・難民救援キャンペーン」の取材を目的としていた。1980年と1983年には、先輩記者が、タイ側に流出したカンボジア難民を取り上げたことがある。その後しばらく、取材対象地域がアフリカに偏っていた。めまぐるしい国際政治の動きの中で、インドシナ問題全体が“地盤沈下”したせいもあるが、私たちは、もう一度、読者の関心をアジアに引き戻そうとした。「難民の今」と、それ以上に「難民の祖国の今」とを同時に取材し、双方の人間の暮らしぶりから問題点を提起してみたいと考えていた。このため、カンボジア取材を終えると、すぐにバンコク経由でタイ領内の難民キャンプに向かい、つい数日前まで飛び回っていたカンボジアを、国境をはさんでながめることになる。

私たちの視点は、普通の人の、普通の生活を垣間見ることにあった。カンボジアでも押しきせの「見

学」や「視察」、政府高官との公式的な会見は、なるべく避けることにしていた。この希望をカンボジア政府も理解したのだろう。セットされた病院、孤児院、学校などの施設取材は時間をたっぷりとり、分刻みの駆け足になることはほとんどなかった。さらに、ほぼ無理だろうと入国前に半ばあきらめかけていた地方都市訪問も日程に組まれていた。

ベトナム戦争当時、米軍が「オウムのくちばし」と呼んだスバイリエン県の最深部、その隣のプレイベン県。首都プノンペンの南のタケオ県と西部のコンボンズプー県。それに、「飢餓」とは直接的には結びつかないが、カンボジアのシンボル、アンコールワット。スバイリエンとタケオでは、それぞれ1泊できた。

いうまでもなく、日本とカンボジアには国交がない。私たちの入国の窓口を引き受けてくれたのは、ユニセフとJVCだった。特にJVCの熊岡路矢、箕田健一両氏は現地外務省との折衝はもちろん、地方都市取材にも同行し、その行程でJVCを含めた各国のNGOの活動ぶりもつぶさに見ることができた。以下は、カンボジア国内の「国際援助とNGOの役割」に触れる部分について、取材ノートからピックアップしたものである。



(上)ヒビ割れた田んぼが地平線にまで続いている



(右)廊下にも子どもたちがあふれている

タケオの元日本留学生

「私たちの国には、何もないんです。本当に、見事なくらい、ないんです」。タケオ市の県立工業省技術事務所で出会ったノップ・ティムさん(35歳)は、すぐような目つきで私たちを見た。

1972年から日本の横浜国立大学工学部に留学(当時の名前はソク・ティム)。学上号を得て大学院に進学した後、ボル・ポト政権下の祖国に帰国したまま消息が途絶えていた。その生存を確認したのは簗田氏である。井戸掘りの指導でこの市を訪れた際、いきなり日本語で「日本人ですか」と話しかけられたという。「学部の卒業証明書を手に入れる方法はないだろうか」という相談に簗田氏が動いた。私たちが訪れた時は、その話を伝え聞いた大学当局が証明書の交付に腰を上げ始めていた(この半月後に交付された)。

外国人記者のインタビューを受けるのはこれが初めてのこと。ことばを選びながら、ノップ・ティムさんは語った。

「ボル・ポト政権時代、カンボジアから日本に20数人が留学していた。しかし、当時の極端な鎖国政策や、断片的に伝えられる不穏な動きから、留学生の間に警戒心が生まれ、帰国したのは私を含む3人だけ。一足先に帰国した他の2人は、プノンペンの空港に着いた途端に逮捕され、投獄の末、刑死した」

「私は逮捕こそまぬがれたが、ボル・ポト兵に西部地方まで強制連行された。間もなくヘン・サムリン政権が誕生。今度は、スパイ容疑で2年間投獄された。出獄後は結婚もし、2人の子供に恵まれた。飲料水確保に悩む祖国に役立てようと、ポンプや水車などの流体機械工学を日本留学時代に専攻した経験が買われ、4年前から、この事務所で約380人の技術者の指導に当たっている」

「ここにある機械を見て下さい。大半がシハヌーク時代に輸入したポンコツですよ。故障すると、修理部品がないのでお手上げ状態。技術者だって不足している。私が青春を過ごした日本からの手助けをぜひ、お願いしたいのです」

「政治の壁」というのはたやすい。それにしても、証明書の交付を要求する正規のルートもなく、元の留学先である日本に、「援助が必要だ」と訴える方法もない現実。簗田氏との出会いがなければ、そして、私たちとのインタビューの機会がなければ、元留学生の声は「壁」を超えることはなかっただろう。民間レベルの国際援助、協力とは、こうした「壁」

を薄くし、低くすることではないか。

私たちは、タイ・バンコクに出国後、インタビューを原稿にまとめて打電した。「“地獄”見た元日本留学生 新天地で『工場、機械を』カンボジア」。ノップ・ティムさんの思いのたけをぶちまけているような大見出しが、社会面に躍っていた。(この記事は、私たちが所属する大阪本社発行分に掲載された)。

スパイリエンの赤土

京都スパイリエン市で1泊した後、ベトナム国境沿いに向かった。英国のNGO、OXFAMのメンバー、バーナード氏も私たちに同行した。彼も、簗田氏と同じ井戸掘りの専門家だ。3日前から掘り始めた井戸がどうなっているのか、見に行くという。

途中の道はデコボコである。「宇宙飛行士の訓練をするには適しているかもしれない」。バーナード氏が軽口をたたく。うまいことをいう。車が穴ボコに突っ込むたびに、私たちは座席で跳びはね、頭を天井にぶつけた。ロン・ノルのクーデター以後の動乱と自然災害。とても道路の補修にまでは手が回らなかったらしい。

道路脇に、中国製の戦車が放置されたままになっていた。砲がベトナムの方に向いている。ボル・ポト兵のぶっそうな忘れ物らしい。

乾いた土煙の中を2時間。プレ・ロボン村に着いた。バーナード氏の案内で井戸掘り現場を見る。ちょうど掘削機が、地下57メートルのところで水脈を掘り当て、水が吹き出したところだった。

人口492人。その4人に1人が集まったと思われるほどの人垣から「水だ、水だ。これでひからびることはなくなった」と歓声が上がった。バーナード氏の顔が誇らしげだ。「もともと、この一帯は、地下に無尽蔵に水があるところなんだ。各国が協力して掘りさえすれば、水に困ることなんてないんだ」

もう1カ所、今度は、以前に掘ったという井戸の使用状況を見に行った。ベトナム国境からわずか3キロ。ヒビ割れた田んぼが地平線にまで続いている。

この井戸は使われていなかった。水脈が涸れたのではない。ポンプが故障し、それを修理できる人がいなかったのだ。いくら掘っても、技術者を養成できるシステムが確立していなかったら、援助は空振りに終わるだろう。

私たちの姿を見て集まってきた農民が、井戸のそばの赤土を投げ上げた。水分を全く含んでいない土

は、空中で砂粒のように細くなって、私たちの頭上に落ちてきた。「どうにかしてくれ。何とかしたいんだ」。無言の農民の目が、そう訴えているように見えた。簗田氏が「焦ってはいけないと思う。我々の技術が伝わるまで粘り強く待つ。それが援助の精神ではないかと思う」と説明してくれた。

廊下入院

プノンペンの国立子供病院。幅2メートル、長さ70メートルの廊下一面にゴザが敷かれ、寝たきりの幼児と、へたり込んだ母親が約50人もいた。たれ流しの排せつ物と、汗とが混じったすべたにおいが鼻をついた。150のベッドはいつも満員で、あぶれた患者が廊下に“入院”するのだ。

この病院は、米国のNGO、ワールド・ビジョンの援助で建てられたという。今も外国人医師が、カンボジア人の医療スタッフに協力している。私たちが廊下のすさまじい光景にたじろいでいる時、オランダ人のシュミット医師が回診中だった。「ともかく、この国の衛生状態が悪いことに尽きるよ」。シュミット医師は肩をすぼめながらも、精力的に子供たちの間を歩き回った。

ボル・ポト時代、医師や教師は目のかたきにされた。ヘン・サムリン現政権誕生時、医師は全土に約50人しか生き残っていなかったという。医師は促成栽培では育たない。現在も、カンボジアでは医師不足が深刻な問題だ。外国の手も借りたい。事実、ワールド・ビジョンなど欧米のNGOや赤十字が医師を派遣している。しかし、同じアジアの日本の医師の姿は、カンボジアでは見られない。

ユニセフのプノンペン事務所で得た資料によると、この国の人口は710万人で、平均寿命は44歳。15歳以下の子供は250万人だが、5歳以下の幼児の4人に1人は病気で死ぬという一。

「モノとカネ」の援助からの転換を

私たちが帰国した後、「87年度版我が国の政府開発援助（ODA）」が公表された。それによると、日本のODAは、昨年約9500億円に達した。これは、円ベースだと前年比4.8パーセントの増だが、円高のドルベースにすれば、5割近くもの伸びという。金額では、米国に次いで世界第2位の「大国」ということらしい。だが、国民総生産（GNP）に対する日本のODAの比率は、開発援助委員会（DAC）諸国の平均を下回り、国際社会からはいっそうの増額

が要望されている。

いや、叫ばれているのは量の拡大だけではない。質の充実も急がれているのだ。カネだけ増やしても、相手国にとって必要な開発や、その国の人々の生活向上にどれだけ役立つのかを考えなければ、「援助」の精神とはかけ離れたものになるだろう。

救いを求める開発途上国では、今、国づくりに役立つ技術移転を要望する声が高まっている。この要請に応えるには、政府関係機関の職員だけでなく、援助の現場で働く民間のエキスパートを増やすことが必要になってくるだろう。国交のないカンボジアのように、民間の援助しか考えられない場合もある。国際政治が複雑化すればするほど、「政治の壁」を超えて、多種多様な活動ができるNGOの存在が、今後、ますますクローズアップされてくるのではないかと思う。

私たちは、タイ領内のカンボジア難民キャンプを回った時、そこで活動するボランティアの存在以上に、日本からの「モノとカネ」に驚いてしまった。「モノとカネ」も大切だが、現地で悪戦苦闘している人たちにこそ、もっと評価が与えられるべきだと思った。

日本には現在、約260ものNGOがあるといわれている。しかし、欧米と比較すると、その活動歴は浅く、不幸なことに、社会的な評価も必ずしも定まっているとはいえない。NGOの活動は、善意の民間の寄付に頼らざるを得ず、どの団体も資金難という大きな問題を抱え、スタッフの生活保障にも頭を悩まさなければならないのが現状、と聞く。私たちの連載の間にも、「私も活動をしてみたいが、生活を考えるとどうも……」という読者からの手紙を何通か受け取った。

だからといって、「援助大国」の政府がNGOを自らの援助政策に組み込むべきだといいたいのではない。自由な発想で、日本と相手国との架け橋を目指そうとするNGOの主体性を尊重しながら、支援にも心を配る仕組みができないか、ということである。

私たちが出会ったJVCをはじめとする各国のNGOの関係者たちは、もちろん数が限られている。誤解も多少あるかもしれないし、「これがすべて」としたり顔をするつもりもない。ただ、限られた体験から言えるのは、その地をはう行動力、発想が、これからの時代を支える「何か」を生むかもしれない、という予感である。

特集

カンブチアに生きる人々

豊かな恵み



①



②



③

カンブチアの豊かな大地に暮らす人々は、もともと“飢え”など知ることはなかった。①蓮池での格闘の末、晩のおかずをつかまえた。②かつてカンブチアは米の輸出国だった。今年の干ばつは、まだ立ち直っていないこの国の人々にとっては大きな痛手だ。③カボチャのふるさとカンブチア。

④



⑤



1 家団らんもとりもどした

自転車は通勤の足。車はほとんど見かけない

⑥



女たちは重要な働き手

⑦



とりもどしたくらし

いたる所で小さな子どもたちに出会う ⑧



生きていることは働くこと、そして楽しむこと

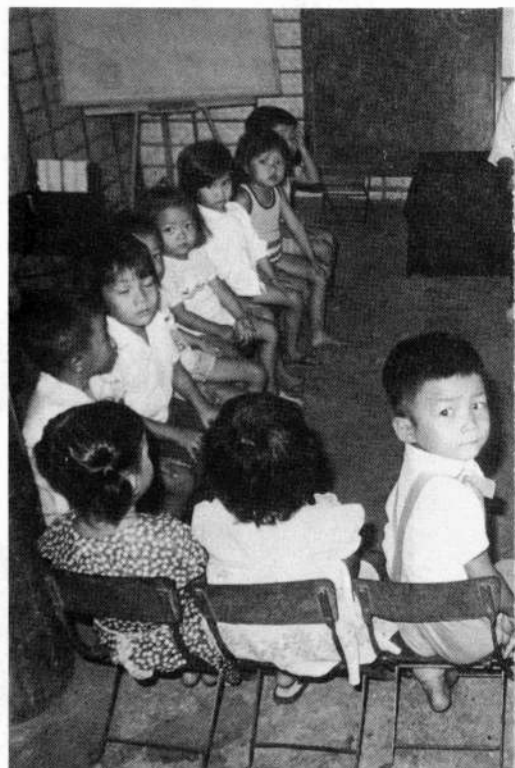
⑨



⑩



芸術学校での真剣なまなざし



黒板と白墨は大切な勉強道具

⑬



水くみはここでも女の子の仕事

⑭



カンプチアの子どもたち



11

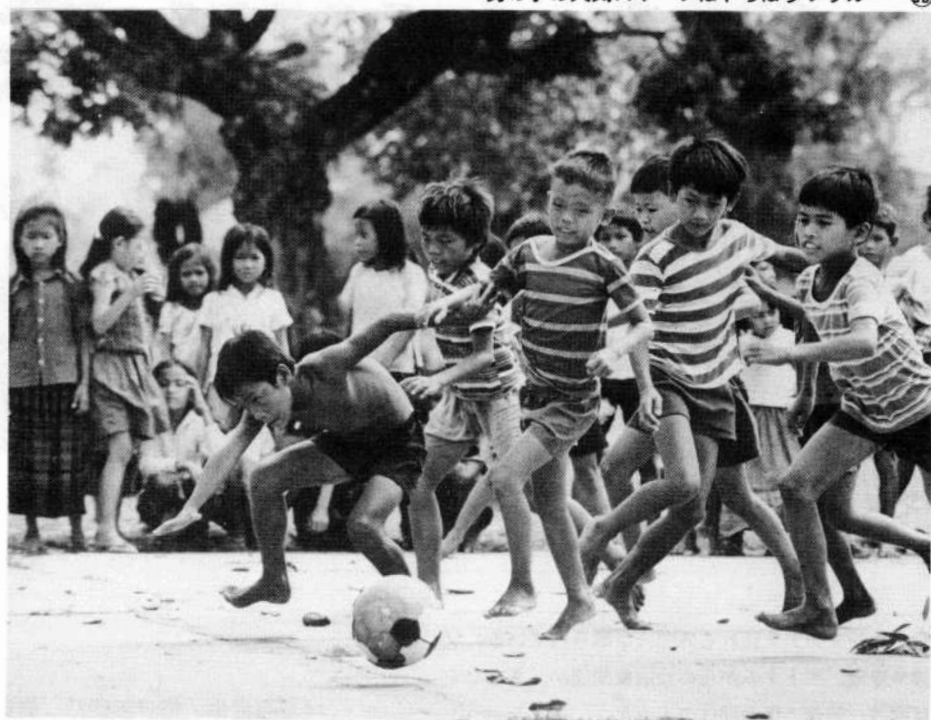
働くお母さんが多いので託児所は満杯だ



12

おじさん！ たばこ買ってよ

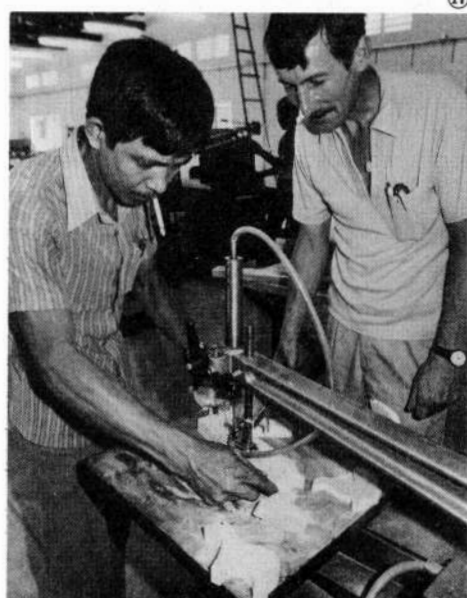
男の子の人気スポーツはやっぱりサッカー 15



救援団体の仲間と



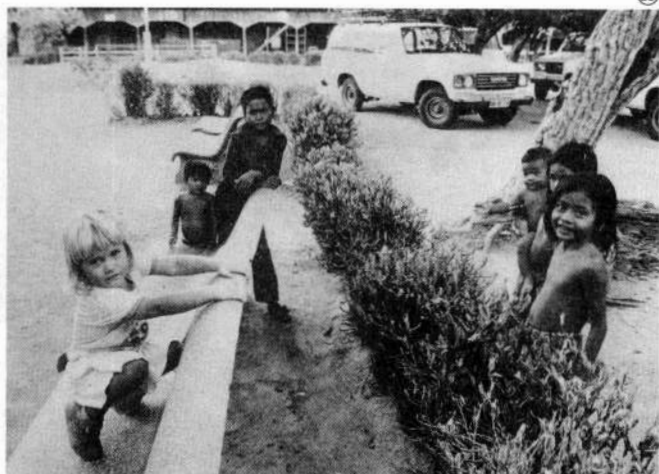
農村女性のための識字学級に飛び入り参加したユニセフのエバさん



ヨーロッパの専門家から木工を学ぶカンブチア人



以前に取り付けた井戸の具合を見てまわる。養田さんにとってカンブチアは第2のふるさと。



カンブチアの子供たちに注目され、てれるニコール
(ユニセフ職員の子供)

今、カンブチアを訪れる外国人は限られている。ソ連や東欧、ベトナムからの政治顧問団が、さもなくば国連、西側の援助団体の人々だ。

(写真提供 / 毎日新聞社 撮影 / 阿佐部伸一)

若者たちが惚れこんだ国

ピースボート 小川寿美子

カンブチアへ

王宮の前でゾウさんに乗りたい、これが一昨年前19才の私がピースボートでカンブチア訪問を希望した理由であった。その当時、私は波尔・ポト政権下に於ける虐殺の横行のことも、その後の国情もほとんど知らなかった。それだけに自分の認識外の、しかも想像をはるかに越えたカンブチアの現実を目の前に突きつけられて、私は自己内部でどう対処したらよいのか非常に戸惑ったのを覚えている。

そして今年の夏、133名のピースボート参加者がカンブチアを体験した。私が初めてこの国を訪問した時と同様、今までの認識と肌で感じた現実のギャップを、身にしみるほど味わったと語る人が少なかつたようである。カンブチアに是非とも訪問したかった理由は「波尔・ポト政権による虐殺の現場跡を自分の目で確かめたいから」という人が断然多かった。「『キリング・フィールド』や『カンボジアの旅』などでその惨状を知り、人間として一度は見ておかねばならない現実ではないかと思って」と参加者の岩切さんは語る。「わけのわからないことも実際見てみると理解できるようになるんじゃないかなあ」。また仏像やお寺巡りに関心のある金井さんは「アンコール・ワットに魅せられて」の参加。しかし残念ながら雨天のためアンコール・ワットには行けず、急きょプノンペン市内見学となった。そのため日帰りグループの参加者の中には、政治犯収容所兼拷問所の Tuol Sleng や、虐殺された人々の骨が並ぶ Choeung Ek 村に、何の心の準備もなく訪問することになったという人が多かった。

虐殺の恐怖と死への無関心と

「Tuol Sleng で見た鉄格子のベッドの下にこびりつく、どす黒い血の跡が一番恐怖を感じた」と古山さん。彼女の場合、ピースボートに乗船する前から日本に住むカンブチア難民の友だちを通して、強制労働があった話などは直接聞いて知っていた。だが虐殺の話題となると「やはり聞いただけでは信じられ



習ったばかりのクメール語で値切りの交渉に余念がないなかつた」という。「自分の目で虐殺現場跡を見ることによって、ようやく彼らの波尔・ポト時代の体験談が生々しく伝わってきました。

中学生の鈴木君にとってショックだったのは Tuol Sleng に展示してある、拷問や虐殺に喘ぐ民衆を描いた油絵だった。「僕には、後に残された死骸や拷問の道具より、その場を再現しているあの絵の方が何か考えさせられちゃったなあ」。

以外なのは、Tuol Sleng より Choeung Ek 村でみる 9000 余の頭骸骨の山の方が死のインパクトを感じなかつたという人が多いことである。骨と化した人間の姿は“死”を紛れもなく証明するので、それだけ一層恐怖も感じるのではないかと想像しがちである。だが実際行って比較してみると、なるほど白骨の山の前では知覚が、若干麻痺状態になるのを感じた。もちろん「頭骸骨を目前にして頭を舐められたようだった」と、恐しさを形容する人もいたことは確かである。

しかし「写真で見慣れていたのでかなあ、ショックはあまりなかつた」という大学生。いささか驚いたのは、分別のない小学生が冗談まじりにも頭骸骨に触れながら「一つお土産に持って帰っちゃおうか」と言い切ったその無神経さである。オカルト・ホラー映画の影響で日本の子供たちがいくら死や恐怖に慣れているとはいえ、私には残念でならなかつた。

What's ピースボート

重いテーマを軽ーくやってのけるのがピースボートの真骨頂である。1983年の処女航海以来、アジア・太平洋の戦地への旅を続けてきた。スローガンは「過去の戦争を見つめ、未来の平和をつくる」。

年1回の航海に向けて、春先から準備をする。中心になっているのは20代の若者たちだ。寄航地の選択、船上プログラムの企画、水先案内人や寄航先の人々との打ち合わせなど膨大なスケジュールを、その若さと体力にものをいわせ、こなしていく。毎年500~600人の人が参加するから大変だ。計画は大胆に、準備は周到に。

どんなことをやっているのか、ちょっとのぞいてみると、洋上平和講座（これは水先案内人となっている各専門家やジャーナリストが行う）、映画・ビデオ上映、洋上結婚式、仮装パーティ、盆踊り、洋上大運動会、はてはカルチャセンターばりに、外国語講座、ヨガ教室、工芸教室などなど、そのほかにも長い船上での生活を楽しむ企画は思いつくままだ。

船の上で大いに友好をあたためた後は、寄航地での交流会が待っている。というわけでなんやかや盛りだくさんなのである。ただしこれらの催しは自由参加なので、それぞれが好きなものを楽しめばよいとのこと。ワイワイ楽しみ、語り、とにかく行動すること、これがピースボートのモットーらしい。

再来年の89年は、89日間89万円で世界一周航海をめざしている。現在企画段階から参加できるボランティアスタッフを募集している。ボランティアには特典があり、手伝った分時間制で料金が安くなり、中にはただになってしまう人もいという。

ちなみに世界一周コースは、上海、香港、インドを回ってスエズ運河から地中海沿岸を通り、マイアミ、パナマ運河、ガラパゴス諸島、そして南太平洋の島々を巡る第一案が考えられている。第二、第三の案も考えていきたいそうだ。

予約、お問合せは 03-232-8561

〒160 東京都新宿区高田馬場
2-14-8 NTビル4F

また「骨を積んでいたからといってそのままポル・ポト時代の虐殺を信じることはできない。Tuol Sleng にしろChoeung Ek にしろ、ちょっと宣伝過剰のところがあるのでは」という人もなかにはいた。「どうあがいてみても通りすがりの異邦人にはカンブチアの苦難を共有することは不可能ですよ」。第3者が聞けばいささか冷ややかな意見と思うことであろう。だが「戦争を知らない」私たちの世代は、人間の無差別大量死に現実問題として直面したことがないため、目の前に置かれた白骨の山も、もはや「死」や「恐怖」を超越した単なるオブジェでしかなかったのかもしれない。

ブノンペンの街に出てみる

いろいろな意味で考えさせられた虐殺現場を背に、次は市場を訪れた。私を筆頭に、各自限られた時間内で買物ゲームに全力投球。「短時間の滞在でその国の生活や文化に触れるには市場が一番」と力説するジャーナリストのK氏は、人一倍土産ものを買って占めてご満悦の様子。なかには「豊かな国から来た日本人が貧しいカンブチアの市場で値切ってはいけ

ない」と注意してまわる参加者がいたが、奢り高ぶる気持ちの裏返しでしかないこの意見に、耳を貸す人もいなかった。「値切り交渉だって立派なコミュニケーションの一部よね」。私もこれには大賛成。バスに戻るとみんなで買ったものの品評会が始まる。「あっ、俺、ふっかけられたんだ」「いよっ“値切りの神様”」。誰かが買ってきたカンブチアのクッキーがまわってくる。それを頬張りながら話題は絶えない。

しばらくすると芸術学校に到着。そこでは生徒によるカンブチア民族舞踊と民族楽器の演奏が披露された。特に魅惑された踊りは“アブサラの舞”。古代クメール王朝時代までタイムトンネルをさかのぼった気分。中年男性は、踊り子の幼ないながらに色気たっぷりの流し目に、みなイチコロ。私などは彼女たちのように美しくしなやかに指が反らないものかと真似したら、骨がポキポキ鳴って恥をかいてしまった。

若者たちの出合ったカンブチア

カンブチアの伝統文化にたっぷりと浸った後、現地に一泊予定の63名の訪問者は青年団との交流会に出席した。「最初の挨拶はすごく堅苦しくて、やっ

ばり社会主義の国だなと思った」。しかし徐々に参加者の気持ちもほぐれていった。「私たちを迎えてくれた200人ほどの児童たちの目が独得で印象的だった」「彼らが日本語でピースボートの歌を合唱してくれたことに感動」「カンブチアでディスコが楽しめるとは思ってもみなかった。これがなんといっても最高だったな」とうれしい反応が続々返ってきた。

私自身もディスコの異様な盛りあがりのなか、心ゆくまで楽しんだ。羨しそうに遠目で眺める軍服姿の若き護衛兵には、銃を肩から下ろさせて踊りの輪の中に誘い込んだほどである。だが楽しい体験のなかにも鋭い意見があった。「きれいな制服に身をまとう青年団の子供たちと、^{チュン エイ}Choeung Ek村のボロボロの服を着た貧しい子供たちとの差は、何でこんなに激しいのか。社会主義国家では人民は皆平等だって習ったけれど、実際は違うのだろうか」と、認識の軌道修正を余義なくされた岡田さん。

「カンブチアのディスコ」に関しても「社会主義が思ったより解放されている証拠」という人もいれば、「いや、あれは西側諸国から訪問した我々のウケを狙ったもの」との声も。考えればキリがないが、とにかく7歳の子供から74歳の年配の参加者までが皆、童心にかえて無邪気に踊ったこの交流会は、国境のハンディを乗り越えられた貴重な一時であった。

その夜、踊りすぎで腰を痛めたK氏も、次の日にアンコール・ワット訪問をひかえて高鳴る鼓動を抑えつつ眠りに入ったに違いない。しかし残念なことに、この日も天候等の理由から念願の訪問を諦めざるを得なかった。そのかわり、参加者は、異国からの珍しい訪問者見たさにより集まってきた現地の人々と交流する機会があった。「青年団との交流では人民がガチガチだったけれど、町中で会った人とはすんなりと打ち解けました」「クメール語の跳ねるようなカワユイ発音が大好き!」。また高橋さんは「現地の人の自転車やシクロを運転させてもらって感激。あのはにかむような素敵な笑顔にもう一度会いたい」と言い残し、大学をエスケープしてカンブチアを再訪している。

彼女の外にも今回の旅でカンブチアにぞっこん惚れ込んだ人は数多かった。「貧困のなかでも、とにかく生活しちゃう、あの生命力に圧倒」された野口君、「大きく揺るぎない、この生活テンポに憧れ」た長谷川君。佃さんは「人間が活かされて国が成り立つ姿を実感し、自然の中で生きる姿が、文明国家の日



青年団との交流会（左から2番目が筆者）

本から来た私にとってとても爽やかに感じる」という。

「過去に暗黒時代があったとはいえ、市場にあふれる民芸品の豊富さ、また王宮等に見られる豪華一点張りの装飾に触れると、今回共に訪れたベトナムより文化にゆとりを感じる」のは、偉大なる古代クメール王朝から継承されてきた王国文化の名残りであろうか。「社会主義でみんな平等っていうのもいいのかもしれないけれど、この国はブータンの様に王国のままの方が幸せだったんじゃないかなあ。まあ、地理的には不可能だけどね」と旅好きの飯沼さんがつぶやく。「タイ国境では戦闘が現在も進行中なんですよ。私たちを護衛してくれたあの幼ない子供たちは、これからも銃を持ち続けなくてははいけないのかと思うと複雑な気持ち……」と感慨深げに吉原さんは語る。

カンブチアへのこだわり

ほんの短いカンブチア滞在ではあったけれども、曲がりなりにもさまざまな印象を胸に抱いた「体験者」は今、全国に散らばっている。なかには帰国後、早速カンブチアの写真展や報告会を開いて、周囲の人にも自分の体験した世界を共有してもらおうと頑張っている人もいる。

またJVCに顔を出して、今の自分に出来ることは何かと模索している人もいる。カンブチアでの体験を一過性の自慢話に終わらせることなく、これを契機に活動を開始している人の便りを聞くと、私も思わずウズウズしてくる。私が社会や世界の動きに関心を抱くようになったのは、この国を訪問した時から始まった。私に啓発を促してくれた意味で感謝の気持ちをもちつつ、未だ実現していない念願の“ゾウさん”に跨るためにも、今後もカンブチアにこだわっていきたいと思っている。

決 断 の 内 側

ソマリア事業担当 鴫田三芳

ソマリアのジャボレでの活動を、来年3月一杯で終了するに至った経過についてお伝え致します。

プロジェクトの経過

エチオピア国内の干ばつと政治不安により、1984年6月から新たに約14万人の難民がソマリアに流入した。JVCが1983年から活動してきたルーク地区にも約2万4000人が到着し、これがきっかけとなり、これら新難民への活動が開始された。

この流入直後の数カ月、ソマリア政府難民局(NRC)と国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)による難民認定作業が一向に進まなかった。その結果、食糧、水、医療などの緊急救援は、それぞれを担当する政府機関や民間団体が既にあるにもかかわらず、開始されないままであった。

それを見かねたJVCのスタッフは、戸別訪問し危険な状況にある人々を見付けては、臨時病棟に収容し、給食や投薬による治療などを始めた。

右の表は、今年3月までの大きな動きである。

さて、エチオピア国境に近いマグドール・キャンプからソマリア中部のジャボレ・キャンプにほとんどの新難民が移されたのを機会に、新難民に対するJVCの活動はジャボレに大きく移行していった。1986年9月にはマグドールが閉鎖され、翌月、JVCもマグドールでの活動を終え、ジャボレだけになった。

そんな矢先、ジャボレにおけるJVC医療活動をサウジアラビア赤三日月社(SRCS)に移管する噂が流れ始めた。当のJVCは話の外に置かれたまま、SRCSとソマリア政府とで交渉は進められた。

そして今年4月、NRCが公式文書で「JVCの医療活動をSRCSに移管せよ」と申しわたしてきた。この背後には、難民受け入れに関するソマリア政府の方針や、ともにイスラム教国である両国の密接な関係など、種々の政治的配慮があり、われわれはソマリア政府の決定に従わざるを得なかった。そして、4月下旬に移管を決定し、6月23日、移管を終了した。その後は、植林、インカム・ジェネレーション(収入向上)、家庭菜園などを続けてきた。

この移管を内部決定する前後から、その後の活動について現場を中心に検討が始められた。去る7月にJVCソマリア事務所長が一時帰国した際、彼を交

え本部事務局で検討し、8月1日に予定していた第17回執行委員会で最終決定するはずであった。

しかし、プロジェクトの意義をどう位置付けるかで意見が分かれ結論が出ず、9月上旬に一時帰国するジャボレのチームリーダーからの最終提案を待たざるを得なくなった。

ところでJVCは、設立以来いくつものプロジェクトを始め、そして終了してきた。その開始時、内容の大きな変更時および終了時でわれわれが考慮する中心的事項は、活動の「意義」、活動を実行できる「人材」、活動を支える「資金」、およびJVCの全活動を念頭に置いた「組織問題」である。どの事項も多くのファクターに影響され、各事項同士も関係し合い、また時としてスタッフの主観も絡み、判断が分かれ易い。この中でも一番判断し難いのが「意義」であろう。

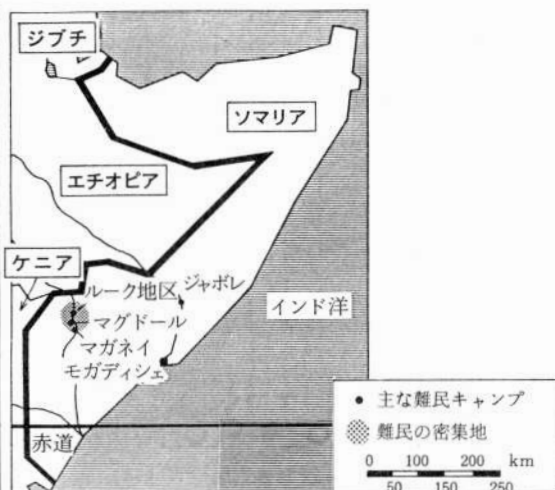
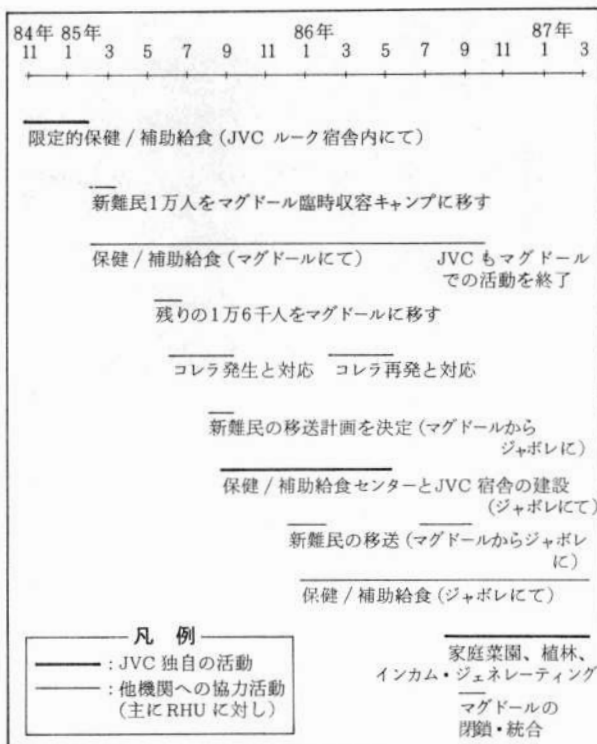
植林プロジェクトの「意義」

ここで植林プロジェクトを例に、その「意義」を検討してみよう。タイのカオイダン難民キャンプとソマリアのマガネイ難民キャンプで全く同じ内容の植林プロジェクトを計画する。どちらでのプロジェクトが意義深いだろうか。私は、後者、即ちマガネイ難民キャンプでの植林の方が意義深いと思える。

なぜなら、カオイダンの難民は、日々の煮たき用の薪はもとより家屋さえもUNHCRから供給されるので、自分たちで木を集める必要がない。さらにまた、カオイダンに定住できない彼らが長い時間のかかる植林を積極的に行うわけもなく、熱帯モンスーン気候だから種をばら蒔くだけでも木は生長する。

一方マガネイ難民キャンプでは、カオイダンのそれとは全く逆で、薪は難民自身が集め、家も自分で建てなければならず、熱帯乾燥地帯ということも手伝って、砂漠化が急速に進みやすい。また、ソマリア政府の定住許可が下り、一部の難民は定住を望んでいる。これらの難民たちにとって、木々は生きてゆくために不可欠で、彼らはそれを切望している。

上記の例のように、活動の「意義」の軽重をはかる場合、活動の目的や実施方法はもとより、対象者の意志、彼らを包む政治的・社会的・文化的背景や状況、自然環境なども大きく影響してくる。



の優先順位を設定した。

- ①緊急状況：発生直後などの、生命が著しく危険な状況で、人命救助が最重要課題となる。
- ②本国へ帰還し定住できる状況：難民という立場から脱却し自立していくことで、難民問題の解決につながる。
- ③第一庇護国が第三国に定住できる状況：同上。
- ④滞留状況：緊急状況は去ったものの、行き場もなく難民キャンプに滞留し、ただ外部からの援助に依存し、難民であり続ける。

この優先順位にジャボレ難民キャンプを位置付けると、第4番目の「滞留状況」に属し、ここで活動する意義は比較的軽いということになった。

次に、「難民たちの意志」という視点から植林活動を考えても、あまり大きな意義を見出せなかった。なぜなら、この地に定住したいという意志が明確でない難民たちが、自分で木を植えて育てるという息の長い計画を切望しているとは思えないからだ。ソマリア政府の定住許可も定かではない。

さらにまた、活動の意義とは直接関係ないが、他のキャンプに比べジャボレに対するUNHCRの消極的な関わりは、われわれの活動をやりにくくする。

もちろん、ジャボレ難民キャンプを放置すれば、ルーク地区のように砂漠化するであろうし、先の例にあげたマガネイ・キャンプと同様に木々は日々の生活に欠くことができない。この点での意義はある。

しかし、より広範にこのプロジェクトを再検討した時、結果的にはあまり大きな意義を見出せなかったのである。

このような経過で、「新たなプロジェクトは行わず、現在継続中の活動の目的を極力達成するため、来年3月まで続け、一応終了する」と決断した。

では本題にもどり、ソマリアのジャボレにおける植林プロジェクトの意義はどうみたら良いものか。

9月、現場から出された最終案は、従来の植林プロジェクトを発展・拡大することが中心で、薪の燃焼効率を上げるための七輪の製作・普及・従来から行ってきたインカム・ジェネレーティングの継続も含まれていた。後者の2つは活動期間が比較的短く、予算的にも極めて規模が小さいので、植林プロジェクトに議論が集中した。植林プロジェクトの内容は、

- ①難民によって伐採され始めた地元の木々をフェンスで囲い、それらを保護する。
- ②成長の早い外来種の苗木を育て、難民各家庭に配り、彼らの家の周囲を植林する。
- ③従来から管理してきた植林区は、徐々にその給水を減らし、①に近い形態へ移行する。

終了を決断する

この最終案について、ジャボレのチームリーダーを交えて本部事務局で会議が開かれた。しかし、活動の「意義」をどうみるかで意見が分かれ、結論が出せなかった。この会議の4日後、ジャボレのチームリーダーと私とで話し合いを持ち、より根本的な視点で最終案を再検討した。

まず、「難民の置かれている状況」という視点から、われわれの活動の意義に軽重をつけるため、次

「栄養関係プログラムを 考えるセミナー」を開催して

女子栄養大学講師 磯田厚子

栄養関係者の交流の場がほしい

「また機会をつくって集まろうね」「今後も何かあったら必ず連絡下さいね」と口々に言い残して、セミナー参加者が帰ってゆき、東金農場のみんなとなんだか急にさみしくなったねと話した日のことを、今でも鮮明に覚えている。あの時集ったそれぞれの人が胸に新しくふっと抱いたものを消すことなく、どう互いに、そして未来につないでゆくことが出来るか。とりえずやってみようと気軽に声をかけたことだが、出会いということの重みと今ずっと感じているところである。

参加者は農場メンバーを含めて18名。北海道から埼玉、東京、愛媛、熊本、沖縄等、文字通り全国からこの場を求めてきた人々。大半が初対面である。半分以上が1965年前後生れの、大学や短大卒業後まもなくの人で、世界の人々とつながる何かがいけど、どうしたらいいのか相談する場も自分の周りには見つけられなかった人々たちだった。

初日の夕食後、ユニセフ製作の「ママチャクラボラータンザニアの栄養指導員」「スリランカのユニセフ活動」とJVCの「エチオピアの鼓動」の映画を見る。地域の健康、栄養状態の向上のためには、単純に食物配給や栄養指導をするのではなく、地域の自然生態系の保護や収入向上、全体的な教育水準の向上も含めた、地域総体としての開発や地域の人々自身による活動の大事さを伝えるフィルムだった。

映画の内容について疑問や意見を聞きたかったのだが、私の進行不手際もあって、なかなか意見が出ない。フィルムと同時に送付された「学習会を開くにあたって」というパンフにあったように、映写の目的や事前の勉強などの準備により、会の成果が大きく違うことを痛感。

そこで、全く自由な交流の場に切りかえた。住んでいる街、仕事、夢、参加の動機、今までしてきたこと等々、今日出会ったお互いの意外な共通点や同じ



栄養士といってもいろんな仕事の間があることなど話はつきなかったようである。

海外活動経験者の体験を共有したい

栄養に関係してどのような活動が行われているのか。参加者の多くが最も知りたかったことだ。2日目の午前の草取りのあと、バングラデシュでJOCV家政隊員として働いた馬上美恵子さんと、ネパール（JOCS派遣）とソマリア（JVC）で活動した角田正恵さんに、各々1時間近く話していただいた。熱心な質問、互いの意見交換など続き、日帰りの角田さんをついに6時半頃まで農場にひき止めたほどだ。

お2人がともに強調し、また話の中から私たちが感じとった大きな事柄がいくつかある。最も大きなことは、外国人が地域の中で何らかの協力活動をする時に目標とすべきなのは、地域の問題解決や活動に自分たちからとり組もうという気持を持つ人々があらわれてくるようにすることだという事だ。栄養関係のプログラムでは多くの場合、食物やその他の品物をはじめとして、栄養知識、食物栽培や調理の技術も「与える」という形になりがちであるが、これが様々な問題を持つ。

バングラデシュのある村に、地元で出来る離乳食の普及などの活動に入っていた時、あるお母さんから「あんたたちなんか帰れ」といわれたり、講習会参加を拒否する人々がいた例が紹介された。その理由は、だんだんわかったことだが、今までに行われていたプログラムに対する不信があったのである。

粉ミルクや米・大豆などはプログラムが終ればこなくなることで、配給担当の村人に頭を下げなければならなくなるなど、どうせあてにならないと思われるどころか、村人同士嫌な思いをすること等々を生じていたというのである。外部のプログラム関係者がひき上げた後は誰もひきつぎ手がないのが通例で、そのくり返しを村人たちは見てきたという

のである。

「帰れ」といったお母さんの子は栄養失調症で、栄養士の立場からは、何とかしたいと思うのであるが母は受け入れない。馬上さんは、自分たちは何か物をあげるために来たのではないこと、子供たちの栄養状態を本当に心配していることを、出来る限りの機会に伝えていったという。次第にその母も参加するようになり、子供の状態も良くなり、笑うようになった。その母は、まわりの人たちにも活動に加わるよう呼びかけるようになった。

地域の人々がやる気になった時の活動には本当に目を見張るものがある。理念的にはわかっていることかもしれないが、現実に対処してゆくには、本当に肝に銘じておかねば出来ないことだろう。とくに栄養に関する活動は、どうしても物を扱い、また人

々の生活の根本にかかわるものだ。それだけに慎重さを特に要するのだろうと考えさせられた。

栄養プログラムそのものの再検討を

今回のセミナー開催でねらっていたことで必ずしも果せなかったこともあった。1つは日本国内で地域栄養の活動の経験者の参加がほとんどなかったことだ。中堅の栄養士からみた海外の活動内容の見直しというのもしてみたかったのだが……。

いずれにしても、多くの人々の体験を個人の中にとどめるのではなく、伝え合い考え合うことがまずは必要なのだと思う。栄養士以外の人々の声も含め、私たちが今後どうしていったらいいのか考え続けていきたいと思う。

参加者からの声

海外ボランティア活動の意味、それを目的としている自己の追求、栄養士へのこだわり……。自分の人生の有り方に疑問を抱くような端緒のない想いに追い立てられ、息詰りかけていたちょうどその頃です。「JVC東金農場で、以前JVCが栄養士の海外ボランティアを募集した際に、問い合わせや志望動機作文を出した人たちなどに呼びかけ、栄養セミナーを」という内容の手紙をいただきました。

セミナーに参加したのは十数名でした。実際に海外での活動に携った経験を持つ人、それを目的としている人、栄養士として働いている人、勉学中の人など様々な立場の人が、それぞれに同じような迷いや悩みを抱え、本当に全国各地から、この3日間だけのために集まりました。このセミナーを精神生活であれ行動の原動力であれ何らかのきっかけにしたいという強い想いを持っていました。

食事をしながら、机を囲みながら、畑の草取りをしながら、布団に入って枕を抱きながら、ビールを飲みながら、様々な人たちから私が受けたものは言葉では言い尽くせないほどです。

実際に海外で栄養士としてボランティア活動をして来られた、角田さんと馬上さんのスライドを見ながらの説明や貴重なお話は、現実性を帯び理解しやすいものでした。海外で活動をやっていく上での政府機関とのすれ違い、活動自体への疑問、後継者の問題など考えさせられる事が多く、また栄養の面でも内容的に大変勉強になりました。

そして今年タイでの活動を終えられたばかりの仲田さんが、政府や活動方針と、キャンプでの生活をしている人々とのほざまで、悩まされたことを話しながらふとこぼされた涙を見た時、これまでの自分自身の考え方の甘

田 尻 真由美

さを何よりも痛切に感じました。最後の夜、泊って下さった馬上さんに夜中遅くまで質問を浴びせました。それについてひとつひとついねいに答えて下さいましたが、栄養について取り組む姿勢や真剣なその態度に、恥かしながらも短大で栄養学を学んでいた時よりもずっとずっと、栄養士の仕事がいかに奥行きが深く大きなものであるかという事を知りました。海外でのボランティア活動の手段として学んだ栄養学でしたが、今またこの機会をきっかけとして栄養士としての活動を心からやりたいと思っています。

集まった人たちの試行錯誤の生き様が言葉のはしほしと表情から垣間見ることができ、素直に私もやってみようという気になったのです。私にとってこのセミナーは、海外での活動の現状・意味・栄養についての内容を知るだけでなく、表現しようのなかった抽象的な自己追求の息詰りから、具体的な何かへとひとつ進む事が出来そうなきっかけとなる大きな出来事でした。短かかったけれど本当に内容の濃かった3日間でした。どれをあげてもまだ言い足りませんが、私たちに話を聞かせて下さった方々、場所を提供して下さいた農場の方々、遠くから似たような想いを抱いて集まった皆さん、この機会を作って下さった方々に心から感謝します。



人はどういう時に唄い、踊るのか 高畑辰弘

劇団JVC（加藤明彦主宰）は、パントマイムを通して、人間の有るべき姿に迫ることを主眼とする演劇集団である。私は創設当初からこの集団に居付いている一介のパフォーマーである。昨年5月、私は研修生として、ソマリアに飛んだ。ソマリ語を解さない私にとって（これは意図していなかったことだが）パントマイムは非常に役に立った。

着いたばかりで右も左も解らなかったころ、資材購入の仕事で、首都モガディッシュに出て、一人のソマリア人労働者と、ホテルの部屋を同じくする夜があった。その時の状況はまさに、西インド諸島に着いた時のコロンブスだった。コミュニケーションする手段がないのだ。彼の鍛え抜かれた肉体はゴリラをも連想させるものだった。その太い腕で殴られた時の痛さを考えると、ついつい“だんまり”を決め込んで一夜を過ごそうと思いがちであったが、私は恐る恐る日本語とマイムで話し始めた。最初はきょんとしていた彼も、次第に何か考え込むように私を注視し初め、笑みまで浮かべはじめた。

図に乗った私は、持てる限りの術を使って彼に話した。今から思うと不思議なのだが、眠りに着くまでの約4時間の間、話題は継続したのだった。どういう仕草で行ったか忘れたが、“下へ冷たいものでも飲みに行こうよ。ジュースにするか、ミネラルソーダにするか”などというデリケートなニュアンスに至るまで私は語っていたのである。別段私の演技のレベル云々を言わんとしているのではなく、違った環境でも共通に育ったものがあれば、簡単に解り合えるのだ。私の場合それが、言葉の要らないマイムであった。私はそれを通して表現しながら、人間それ自体を強く感じていた。

キャンプに入ってから、仕事の合間に給食センターなどで、子供たち相手に定期的に演じた。ストーリーは例えば、“食べる前には手を洗いましょう”とか“物をくれ、といっているだけでは駄目ですよ”とか、言わばおかしさの中にも、お説教的なものを織り込んだものが多かった。しかし、習慣的な問題（日本人とソマリア人とでは、手の洗いが違うといったこと）があり、マイムが未熟なことも手伝って、言いたいことがあまり伝わらない、といったジ

レンマがあるにはあった。しかし子供がよく見て反応してくれ、楽しんでいただけたので、何か月か続けた。この行為は、新天地で揺れ動いていた当時の私にとって、心をリラックスさせ、日々の生活にメリハリを与えてくれたようだ。

私は大道芸人よろしく、カセットデッキに選んだカセットテープを押し込み、キャンプの中に出かけた。音楽を流すと人が集まってきた。私は何の躊躇もなく、自作のマイムを披露した。人々は奇妙な顔で、私の動作一つ一つにコメントし合っていた。終りに近づいていた時、ある一人の男性が突然棒を持って私に向って走って来た。私は仰天して逃げに逃げた。捕まったら殺されそうな気がしたので、軽く1kmは逃げた。

考えてみると、彼が怒るのも無理はない。ソマリア人（アフリカ人）にとって、歌や踊りは神聖なものなのである。その部族、またはその地方に独自のスタイルがあり、それはいわば、彼らの誇りであり一種の重要な自己主張なのである。私は自らの厚かましさに気付き、すっかり消沈し、仕事が忙しくなってきたこともあって、パントマイムの活動をすっかり止めてしまった。

その日の夕焼けは、こっくりと落ち着いた彩りだった。近くの村から太鼓の音がして来た。そこでは男女拳って踊っていた。私はそれが雨乞いの踊りであることをにわかに見てとった。というのも、その年のソマリアは「前の干ばつみたいだ」と現地人が言うほど、降雨量が少なかった。村人たちは、街からポンプを高い金で借り、畑を守るために一日中回し続け、乾きと闘っていたのだ。

彼らは、ヤギの血を飲んだ後、砂を体中に着け、取り付かれたように踊っていた。その踊りは（パントマイムとは比べようもないほど原始的なそれだったが）その人の魂まで見えるようだった。そこでは私という存在自体罪であるように思え動けなかった。彼らは夜になるまで踊り続けた。どういう時に人は踊るのか、どういう時に人は唄うのか。なぜ人間生活に、踊りや唄は必要なのか。私が探しあぐねていた答えはこんなところにあった。風は強くなりつつあった。

NGOを訪ねて

アムネスティ・ インターナショナル

〒160 東京都新宿区西早稲田 2-3-22
第三山武ビル 3F
Tel: 03-203-1050

「活気があるなあ」。これが扉を開けての第一印象だった。古めかしいビルの外観からは想像できない。

アムネスティは国際的な人権擁護団体で、運動には3つの柱がある。(1)暴力を用いたり、唱える人を除いて、政治や宗教などの理由で拘束を受けている「良心の囚人」の釈放を求める。(2)政治囚のための公正な裁判を求める。(3)全ての囚人に加えられる拷問や死刑の廃止を訴える。等である。世界160カ国に50万人以上の会員がいて、そのうち45カ国に支部があり、日本支部はその一つである。

最近の日本支部の活動は大きく2つに分けられる。囚人を招くプログラムとキャラバンだ。囚人を招くプログラムは良心の囚人の具体的な姿を多くの人に伝えるために年1回行っている。今年はアルゼンチンのロドリゲスさん一家が来日した。キャラバンは「自由への願い」という映画を上映しながら東日本で1カ月間行った。上映場所はお寺、教会また自宅で行われ、人数も5人から100人ぐらいと様々だったそうだ。

スタッフの栗野さんは「参加するメンバーが主体の運動。それが僕らの運動の命」とアムネスティについて語る。アムネスティにはその活動の最小単位である「グループ」というものがある。これは「グループ」を家族に見立て、その輪の中に1人の囚人を養子として入れ、その人の釈放まで活動する単位。これが栗野さんの言う、個々の主体的な運動になっていく。この「グループ」は栗野さんがアムネスティにかかわりだしたのと無関係ではない。

栗野さんは、80年の光州事件、インドシナ難民、成田の問題などに触発されてアムネスティに入会した。なぜアムネスティだったのだろうか。どの問題や運動にしろ、一時的なマスの盛り上がりだけで具体的な運動に結びつかないという限界がみえた。ところがアムネスティは地域でグループを作り、国境を越えて囚人を支援して、絶えず意志表明として手紙という具体的な行動を続け、囚人との個別的なつながり

りがあったからだ。

以上のように、アムネスティにかかわっている男性もいるが、活動の性格のためか、会員は圧倒的に女性が多い。支部長のイーデス・ハンソンさん、事務局長代行など要所は全て女性で、事務局のボランティアも主婦が多い。

アムネスティは世界的な組織であるが、日本と海外とではやはり活動の規模が異なる。ただ海外といっても、会員の90%は西ヨーロッパ、北米圏に集中しており、運動資金も9割がヨーロッパなどで支えている。資金の集め方であるが、例えば西ドイツでは飲酒運転で捕まった場合、アムネスティに寄付すれば責任がなくなったり、遺産を寄付することもある。また、テレビにCMを流すなどして、しっかりと市民生活の中に組み入れられている。

これについて「国境を越える発想の問題ではないか」と栗野さんは考える。アムネスティの発想は、国内、国外の枠をはずし、他国の人が拷問されているのも自国の人が拷問されているのも問題の重さは同じとし、国境、考え方、皮膚の色を越えて人権は普遍的であり、守る義務も普遍的であるというものである。この普遍性が日本ではなかなか広まらないのだ。

しかし一方でアムネスティは自国の問題にはかわらない。日本はもとより、どこの国でも同じ態度をとっている。これはよく批判されることだが、かわらない理由として3つある。第一に反政府団体とみられてしまう。国によってはアムネスティ自身が弾圧を受けるかもしれない。第二に世界各国の相互扶助の関係をとるため。これはつまり国際社会の力を重視し、その力が形成されないと、一国の運動がだめになるとそれで終りになるからだ。第三にアムネスティの信条である「人権を守る事は国境を越えた普遍的なもの」であるためには、地域的関心を拡大していかななくてはいけないからである。

では日本国内ではどのような問題があるのかというと、死刑の問題があげられる。去年も処刑者が2人。今年も死刑確定判決が3件出て4人確定したそうだ。「法務省は処刑の事実を発表しないから僕らの知らない所で殺されている」と栗野さんは言う。

最後に栗野さんはこう語った。「活動していく中で、年に数回、実際に起こった悲惨さを自分の中で感じとれる瞬間がある。本当に共感することは不可能であろう。だけどその瞬間があるから活動を続けていく」。(正木幹生)

11月の動き

チャリティーウォークかながわ

11月1日、神奈川県横浜市で「'88チャリティーウォークかながわ」がおこなわれた。チャリティーウォークとは、参加者が事前に家族や友人にスポンサーになってもらい、自分が歩いた距離に応じてスポンサーから寄付金を集めるというもの。「チャリティーウォークかながわ実行委員会」が主催し、収益金はJVCに寄付される。

当日は、あいにくの曇り空で肌寒い気候ではあったが、300人近い参加者があり、紅葉の始まったばかりの公園を結ぶ約9キロのコースに挑戦した。

参加者は、子供から80才のお年寄りまで、日本在住の外国人も多数参加した。また、車椅子の参加者もあり、コース後半の野毛山の長い坂道では、周囲の人たちの協力もあり全員無事完歩。

コース途中では、深まる秋の自然を楽しむ一方、横浜公園での住宅フェアや大通り公園でのフリーマーケットなど各種の催し物もあり、楽しい1日であった。

中間地点の「国際交流コーナーKIS」では、お茶のサービスをする一方、JVCのソマリア・エチオピアのパネル展示やJVC神奈川オフィスを紹介した。また、ゴールの紅葉坂青少年会館では、「エチオピア



の鼓動」の上映会と、エチオピアから一時帰国中の伊東夫妻の講演会を行い、合わせてJVCのPRをおこなった。

収益金は、11月30日現在で、160万円集まり、実行委員長の宝田氏より星野事務局長に手渡される。JVCでは、このお金をエチオピア・カンブチア・国内定住難民の各プロジェクトに6:2:2の割合で配分し活用する。

ゴールで回収されたアンケートによると、回答197のうち、楽しかったと答えた人188人、来年も参加したいと答えた人189人。コース中わかりにくいところがあったとか、PR不足との反省点もあるが、来年もぜひ開催する予定である。

今回のチャリティーウォークを支えていただいた多くの人たち、特に寒い中ずっと立ちっぱなしでガイドやスタンプ係をしてくださったボランティアの人たち、どうもご苦労さまでした。(山口誠史)

JVCチャリティ・コンサート「明日にひらく」I



木幡律子ピアノリサイタル

1月19日(火)開演午後7時

横浜 関内ホール(小)

入場料 2500円(全席自由席)

電話予約 03(835)0516・045(671)7082
お問合せ先

タイ・スタディ ツアーへのお誘い

第2回プライマリー・ヘルス・ケア(PHC)研修が日本人を対象に来年3月20日から31日にかけて、タイ国のアセアン研修センターで行われます。PHCの共通理念は、住民の日々の生活を見据え、その質の向上を目指すことによって住民の健康を回復、維持、増進しようというものです。

そのためには住民の主体的参加、社会的にも経済的にも住民にとって適切な手段、医療、教育、農業その他生活にかかわる分野の人々の協力が最も重要とされています。そしてこのPHCを最も良く推進している国の1つがタイ国です。PHCの姿勢は将来海外協力を目指す人にとっても、また、日本の中で医学、教育を志す人にとっても一度は触れる価値のあるものと考えられます。

コースは、バンコク市内のスラムや大学病院の訪問、農村で働く若いタイのボランティアとともに村

内の家庭に宿泊、講義討論などです。参加を希望する方、関心のある方はぜひ御連絡下さい。医療従事者以外の方の参加もお待ちしております。

費用 タイ滞在費8万円と日本-タイの往復費用
人数 30人

〆切 1月31日

連絡先 林 正男 金沢大学医学部、衛生学教室
石川県金沢市宝町13-1
Tel 0762(62)8151(内2277)
(夜)0762(41)9241

[日程]

- 3.20 バンコク着
- 21 オープニングセレモニー、オリエンテーション
- 22 プライマリー・ヘルスケア講義
- 23 ラマティボディ病院、クロントイスラム見学
- 24 ラヨング県ロイヤルハーバル・ガーデン見学
- 25 チェンタブリ県保健課、及び地方病院訪問
- 26 農村泊
- 27 クラティン国有林泊
- 28 滝登り
- 29 レポート及びディスカッション
- 30 水上マーケットその他見学。お別れパーティ

『THE STONES CRY OUT』

(石も哭く)

— あるカンブチア人の子供時代

1975年から1980年—

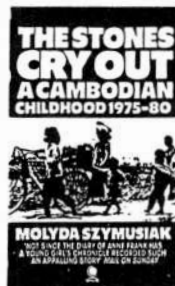
モリダ・スジムジアク著

1975年4月17日、モリダと彼女の家族は他の多くのプノンペン市民と共に、「解放者」クメール・ルージュによって市から追出される。当時モリダは11才。小学校の最終学年であった。

一家は初め、プノンペン東30kmのコキにて、農作業に従事する。次いで西のプルサット県へ移動させられる。この間長時間にわたる重労働、全く不十分な食事と医療のために、家族は一人また一人と倒れていく。祖母、両親、姉妹弟を失いひとりになったモリダ自身、何度か死にかけられるが、奇跡的に回復。1979年、ボル・ポト体制の崩壊とともに、国境を越え、カオイダン難民キャンプに辿り着く。

モリダはボル・ポト体制下の3年8カ月を働き、また家族の死を次々に看取りながら、子供の眼でとらえたものを心に刻みつけていく。

しばしば「アンネの日記」にも比較される、この



あまりにも哀しく、同時にあまりにも美しい(家族の自己犠牲の)物語は、いかなる統計や評論やイデオロギーを越えて、ボル・ポト体制下の真実を語りかける。欧州において、フランス語版が出版され評判になった後、英語版およびそのペーパー・バック発刊となった。

最近送られてきた本人からの手紙によると、モリダは現在24才、パリに在住する東欧系フランス人に引きとられ高校を終えてから、写真家になるべく勉強中、とのこと。「日本語にも、翻訳してもらえれば」と希望している。

表題は、聖書「ルカによる福音書」第19章40節「(イエスは)答えて言われた、『あなたがたに言うが、もしこの人たちが(イエスの弟子達)が黙れば、石が叫ぶであろう』」から採られた。(熊岡路矢)

JVCプロジェクト

1987年11月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC 説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 佐々木志保, 林 達雄, 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・パスカビル
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県及び県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション JVC 説明会—毎月第1火曜日 午後6時～9時 毎月第2土曜日 午後1時～4時		山口誠史
日本国内	●定住難民プロジェクト 1987年度前期(4～9月)の活動状況について各ボランティアから報告があった。この報告を整理し, 報告集の形でまとめる予定である。 11月19日, 神奈川オフィスで「福祉」をテーマに学習会を開催した。ケースワーカーの黒川京子さんに講師として参加していただいた。 - 現在神奈川県で準備中の国際フォーラムに向けて, 定住難民に対する活動をしているいくつかの NGO が集まり, 話し合いを行っている。 10月27日(於 JVC), 11月17日(於 SVA)と会議がもたれ, 定住難民問題に対する①地域②定住者自身③ NGO, という3つの立場から問題解決の取り組みを模策している。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 横浜キウニスクラブ, 全国老人クラブ連合会 国際交流ホスピタリティ・トラスト	山口誠史 他約60人
	●東金農場 稲刈りがすべて終わり, 生活クラブ生協を中心に販売した。畑は芋掘りが完了。雑草にやられた畑の除草を行った。 東金の農業者2名とスタッフ2名(井本, 飯塚)がカンパチアの農業視察のため, 10月20日～31日渡航した。		井本勝幸, 五十嵐裕昌, 松岡美奈子, 飯塚美奈
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助 大雨期の雨不足のためエチオピア北部の干ばつは必至である。JVCの活動地, マクデク郡も特にひどい地区の1つだといわれる。現在1万人を対象に飢餓を未然に防ぐため, Food for work を実施中。1988年2月からは対象者を5万人にふやす予定だが, 支金難に直面している。 ●総合的復興促進 - 植林 農民, 母親, 子供を対象に指導, その後家庭植林用に苗木を配布。土壌・水源保全用に植えつけを終えた。 - 保健, 栄養 家庭菜園, 離乳食の訪問形式による奨励が母親自身の手で行われつつある。地元診療所とともに母子健康相談も実施している。 - 給水 清潔な飲料水確保のため, 泉の保護をしている。種子銀行, 農業教室も引き続き行っている。	CRDA, 西本願寺, チャリティ・サイクル, メリノール修道士会, 全国老人クラブ連合会, バンド・エイド, 東京グリーン・ウォーク ジャパン・タイムス モロロジ-MIRC, Tree for life の会, 栄光学園	加納 妙, 伊藤達男, 伊藤幸子, 有本敦子, 山田 盛, イェットベルク, ソロモン, バレタ, フェテルワルク, ダニエル

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	●農業による自立促進 現在までに、マガネイ・キャンプ周辺で74ha、ハルバ・キャンプ周辺で59haの農場建設が終了した。JVCが農場用地の獲得から建設までの全てを行う方式から、Group Farming方式に大きく移行しつつある。この新しい方式では、難民が自主的に作ったグループに対して、JVCはポンプ・農具・ディーゼル燃料を貸与するのみである。彼らグループは、2～3年以内に返金する。 ●現金収入プロジェクト かじ屋、パン屋、水屋のいずれも進行中で、パン屋が営業的に一番うまく行っている。 ●コミュニティー・サービス 焼き物及び帽子製作の2コースに加え、英語教育も始めた。先生はいずれも難民たちである。また、市場の日陰作りのためにJVCは材料を提供し、難民たち自らが作った。	UNHCR, 創価学会青年平和会議, 仏国土をつくる会	嶋 紀晶, 金子一弘 浜野敏子, シアッド, 荻ノ迫善六, 船川秀夫, 中岡哲也, 中野周二, モハメッド, ラシッド, アオキ, アブディ・ジョフ
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	前述のように、ジャボレでの活動を来年の3月(もしくは4月)で終了する決定をした。今後は、従来実施してきたプロジェクトを、その目的を極力達成するようにまとめていく。 主な活動としては、①植林: 植林区はソマリア政府の監督のもと、難民自らが続ける。7200本の苗木を配り、キャンプ内に植林する。②収入プロジェクト: 水屋は今年いっぱい、パン屋は来年4月までに返金し終わる。③スタッフ用住居施設: ソマリア政府に移管する。	朝日新聞厚生文化事業団, 砂漠に種をまく人の会 R.I. ジャパン	庄司 美, シュクリ, ハッサン, アブディ,
カンブチア (ブノンペン カンダール県 プレイベン県 スバイリエン県)	10月25日北風が吹き、雨の少なかった雨期が終った。干ばつのため、全国的に米生産の30～35%の被害が予想され、特にカンダール県、タケオ県、コンボン・スプー県、プレイベン県の4県の被害がひどい。 1. サンタビエップ(平和)技術学校、ワーク・ショップ 主な建物の後、倉庫棟(更衣室、トイレを含む)の建設を進めている。年内に完成の予定。小型のクレーンをスタッフの手によって、熔接、製作した。日本からの自動車とかんがいポンプのスペアパーツの到着を待っている。 2. 井戸掘り/給水(OXFAMと共同) プレイベン県、スバイリエン県で続行中。 3. ブラック・ピノウ孤児院援助 8月13日、男子寮の補修完成。雨漏りもなくなり非常に明るくなった。雨といも水タンクも完成し、あとはトンレサップ川からの給水と浄水システムを残すのみとなった。 4. 補助栄養給食 9月17日～24日の本田医師、古西事業担当の現地調査、交渉を経て、カンダール県ブノンペン郡での1988年度RINEセンター建設と、プログラムの担当(JVC/SHARE)が確定した。カウンターパートは保健省、ユニセフ、欧米のNGO。	全国老人クラブ連合会, 創価学会青年平和会議, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団, ILCチャリティグループ, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡青年僧侶会	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, マリー・キャマル [カウンター・パート] タック・カン, メアス・サメット, ゲット・ソー ン

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー, 古本のセール。 季刊『ニュース・レター』(英語・タイ語) 発行。	全国社会福祉協議会	ボンビモン・チャイブーン, 柴田久史, カモン・ミンムアン, スンニー・テイチャリヤクン
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 495人の生徒に対し, 自動車, 単車, 1 シリンダーの各コースの理論と演習, および溶接などの基礎技術訓練を実施している。 今月半ばから RC ケースのインタビューが始まり, 11月24日付で RC が KD に変わった。	UNHCR R.I. ジャパン	谷山博史, 清水俊弘, ソムヨット・ラタナタム, バイトゥーン・チマチュイ
国境のサイト 2, ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食・栄養保健教育 妊産婦, 3 歳以下の乳幼児を持つ母親を対象に, ドライバックを配給し, 栄養教育を行っている。 結核患者, 栄養不良児やその母親, 託児所の子供たちには, 食事の配給を行っている。	WFP/UNBRO	テリース, ブーム, チャンチャイ, トンバイ, スピチャ, 北代り, ソムサック, カレン, エッ, 前野博美 アドレアン, 太平悦子
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎(読み, 書き, 聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深めてもらう。	天理教千葉	石原淑子, フォード・順子, 鶴岡善和 アナン・ブダミリンブラ ティープ, ウィバ・ロンブリック
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 ●クロントイ図書館 新しい図書館が完成。引越しも終了。 ●移動図書 スタッフが交代することあって活動地を縮少し, より密な関係を地域と持つために, 活動内容の再検討をしている。 ●移動学習センター(プラティープ財団, FFSC, JSRC との共同プロジェクト) 9 のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育, また母親グループの育成を行っている。 ●農村 チャャブーン, コラートなどで活動地選定の調査中である。	モラロジーMIRC, JOFIC, 庭野平和財団, 京都国際青年委員会	サマルアイ・ジョンヨー 克蘭, アルニー・スニ ットムンヴァイ, リーラ ・クンナロン, コメン・ スンサマラヤ, 柴田久寿子, バティット・チャンスリヤ オン, スパチャイ・セー リー
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, バラワン島)	・国際移民委員会(ICM) — 第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	石井弘代

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっか
けに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動
を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形が
できました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日
本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等
によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、
宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境
にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、
JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の
活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができま
す。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りい
たします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充
実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の
20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (11月小計 25,500円) アフリ
カの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
 - B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (11月小計 536,630円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
 - C. インドシナ難民救援募金 (11月小計 3,000円) タイ国
内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
 - D. カンプチア募金 (11月小計 390,206円) カンプ
チア国内の復興のために使われます。
 - E. タイ・スラム募金 (11月小計 5,000円) バンコ
ク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及
び図書活動に使われます。
 - F. デッグ・スラム奨学金・基金 (11月小計 698,080円) バンコ
ク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
 - G. タイ農村募金 (11月小計 0円) タイの
農村開発のために使われます。
 - H. 定住難民募金 (11月小計 411,500円) 定住難
民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
 - I. JVC運営経費募金 (11月小計 7,000円) 現場を
支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
 - J. 無指定募金 (11月小計 280,356円)
- ▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)
加入者名—JVC 東京事務所

編集後記

▶今年も12月になってちょっといいニュースが続いている。
現在行われている米・ソ首脳会談と、その前のシハヌーク、
フン・セン会談だ。誰しも力の均衡による平和にくたびれ
て来たのだ。軍事に気を使わず国内を安定させたいと思っ
ている。シハヌーク、フン・センの共同コミュニケには、
カンブチア人自身の手で問題を解決したいという意気込み
が感じられた。プノンペンではシハヌークが帰ってくると
いう噂が流れ、街中が清掃されたという。

少しずつではあるが世界の振り子がいい方向に動いてい
く感じがする。もちろんイラン、イラク、南アなど懲りな
い国々もあるにはあるが。



昭和62年12月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
☎03(834)2388 FAX:03(835)0519
Telex:7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セ
ンタービル9F (財)神奈川県国際交流協
会内 ☎045(671)7082

バンコク事務所 JVC THAILAND
29/3 Soi Saengchan, Sukhumvit40,
Rama 4 Road, Bangkok 10110.
☎391-1117

Telex:87032 COMSERV TH

ソマリア事務所 JVC SOMALIA

c/o UNHCR P.O. Box 2925

Mogadishu,

Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア JVC ETHIOPIA

P.O. Box 6941 Addis Ababa

カンブチア JVC KAMPUCHEA

203 Monorom Hotel Phnom Penh
Letter:c/o ICRC, P.O. Box 11-1492
Bangkok.

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共 350円

Trial & Error (試行錯誤トライアル・アンド・エラー) 第75号

発行日 昭和62年12月20日発行 (毎月20日発行) 通巻75号

昭和57年9月16日第三種郵便物認可

